

令和5年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

令和5年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

- 小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童
- 中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校前期課程、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

- 教科に関する調査〔国語、算数・数学、英語（中学校）〕

次の①と②を一体的に問う調査問題

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ① 児童生徒に対する調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査）
- ② 学校に対する調査（指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

令和5年 4月18日（火） ※英語「話すこと」は、4月19日～5月26日に学校ごと実施

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 17校 837名 中学校 8校 783名 ※北進小中学校を除く市内小中学校

* 学校質問紙調査の結果について

質問紙調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の4観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

- ① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。
- ② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。
- ③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。
- ④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下-3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に係る学校教育への影響等を考慮して本調査が実施されなかった。

調査に準じ、問題を学習指導要領の内容(または領域)、評価の観点、問題形式と分類し、区分別に集計している。各教科の領域は、学習指導要領の内容(または領域)内の区分とし、新たな領域は過去の同系統のデータを参考にすることとした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

(1) 小学校教科全体

()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立小学校 全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数
平均正答数	千歳市	9.2問/14問	9.4問/16問
	全道	9.2問/14問	9.8問/16問
	全国	9.4問/14問	10.0問/16問
平均正答率	千歳市	66%(65.6%)	58%(58.4%)
	全道	66%(65.8%)	61%(61.0%)
	全国	67.2%	62.5%
全道との比較		同様	ほぼ同様(下位)
全国との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い

国語については、全国を1.6ポイント下回り、全国と比較して前回の「やや低い」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。算数については、全国を4.1ポイント下回り、全国と比較して前回と同じく「やや低い」の段階となった。

(2) 中学校教科全体

()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立中学校 全国：国内の全公立中学校
 ※英語の調査結果は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計

中学校教科全体		国語	数学	英語
平均正答数	千歳市	10.1問/15問	6.8問/15問	6.8問/17問
	全道	10.4問/15問	7.4問/15問	7.5問/17問
	全国	10.5問/15問	7.6問/15問	7.7問/17問
平均正答率	千歳市	67%(67.3%)	45%(45.4%)	40%(40.0%)
	全道	69%(69.4%)	49%(49.3%)	44%(43.9%)
	全国	69.8%	51.0%	45.6%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い	やや低い
全国との比較		ほぼ同様(下位)	低い	低い

国語については、全国を2.5ポイント下回り、全国と比較し前回の「やや低い」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。数学については、全国を5.6ポイント下回り、全国と比較し「やや低い」から「低い」の段階となった。英語については、全国を5.6ポイント下回り、全国と比較し「ほぼ同様(下位)」から「低い」の段階となった。

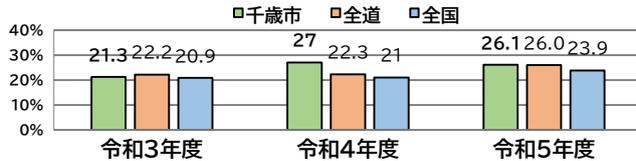
(3) 小学校国語

平均正答率は、今回、全国との差が縮まり、前回の「やや低い」から「ほぼ同様（下位）」という結果となった。区分別では、「書くこと」が前回を下回り、全国との差が広がった。他の領域は前回を上回り、全国同様あるいは全国との差を縮めた。全区分が全国を下回っている。

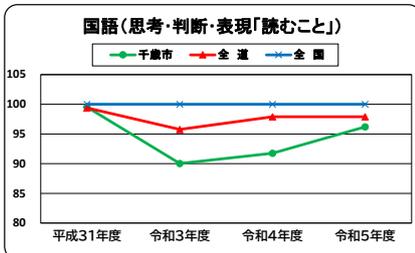
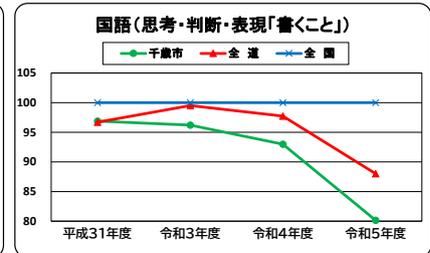
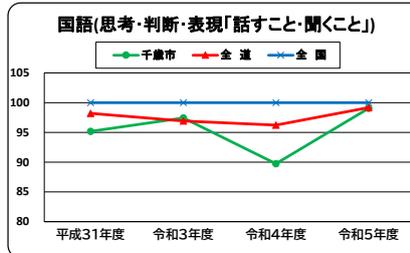
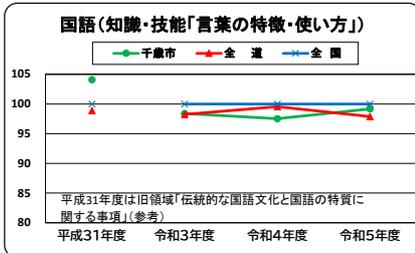
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成31年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
千歳市	63.4 99.4	62.4 96.4	61.5 93.8	65.6 97.6
全道	62.8 98.4	63.2 97.4	64.4 98.2	65.8 97.9
全国	63.8 100	64.7 100	65.6 100	67.2 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

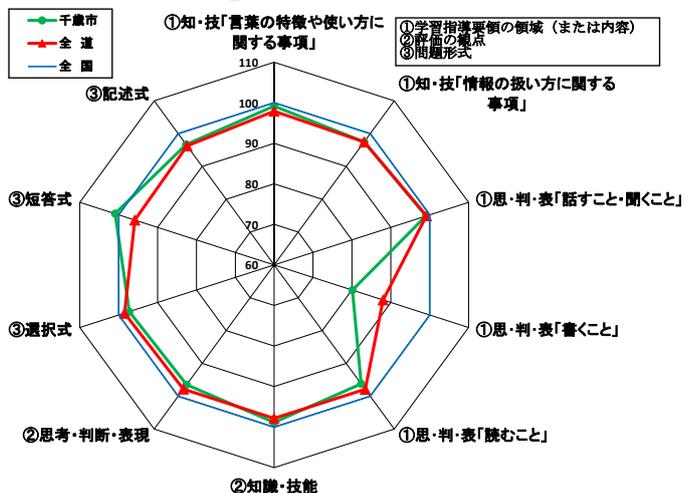


【区分別正答率の経年変化】



知識・技能「我が国の言語文化に関する事項」の出題なし

【区分別集計結果】



「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、「言う」などの尊敬語と「聞く」などの謙譲語についての理解に課題があったが、漢字「期間」を正しく使うことが全国の正答率を上回り、前回を上回った。新内容で今回初めて出題された「情報の扱いに関する事項」では、原因と結果など情報と情報との関係の理解に比べ、図示などにより語句と語句の関係を表すことに課題がある。「話すこと・聞くこと」は、目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる問題が全国の正答率を上回るなど、区分全体で前回を大きく上回り、全国とほぼ同様の状況に戻っている。「書くこと」は、図表やグラフなどを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある。「読むこと」では、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付ける問題、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使う問題の正答率が低かった。問題形式においては、正しい漢字を書く「短答式問題」の正答率は全国を上回ったが、「選択式問題」「記述式問題」はいずれも全国を下回り全国の正答率との差が大きい状況にある。

学習指導にあたっては、複数の情報を整理して自分の考えをまとめたり書き表し方を工夫したりする活動、日常よく使われる敬語の理解を図る活動の充実が求められる。

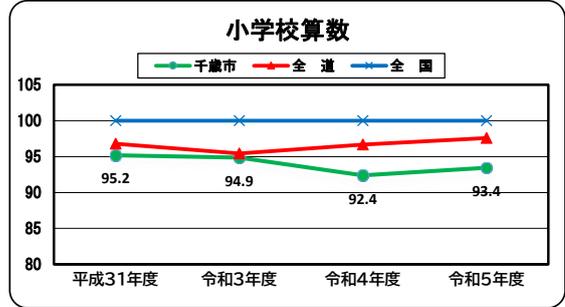
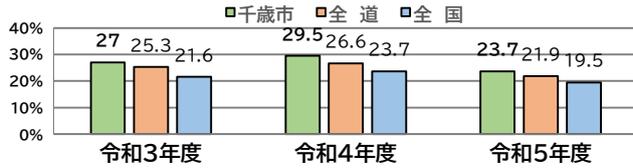
(4) 小学校算数

平均正答率は、今回、全国との差が縮まったものの、前同様、「全国よりやや低い」という結果となった。領域別では、「数と計算」が前回の成績を下回り、4つの領域の中で全国との差が最も大きい。その他の領域は前回を上回り、全国との差を縮めた。

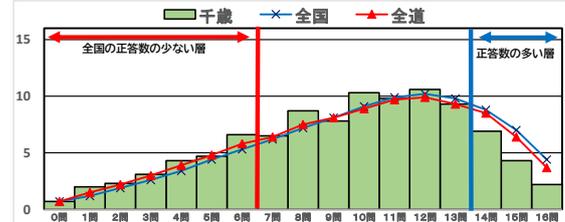
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成31年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
千歳市	63.4	66.6	58.4	58.4
全道	95.2	94.9	92.4	93.4
全国	64.5	67.5	61.1	61.0
全国	96.8	95.4	96.7	97.6
全国	66.6	70.2	63.2	62.5
全国	100	100	100	100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

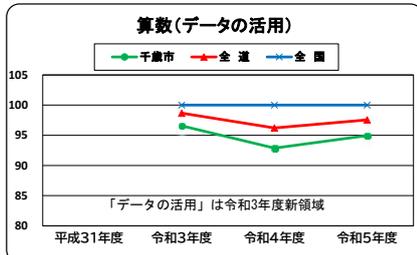
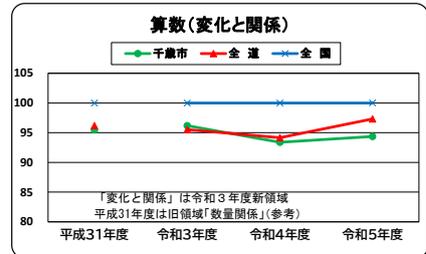
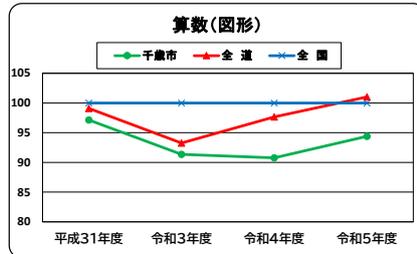
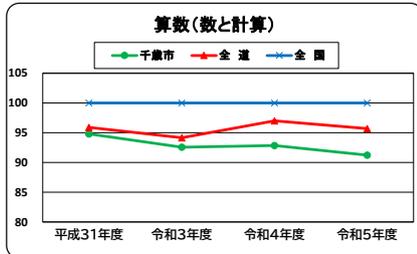


【正答数分布】

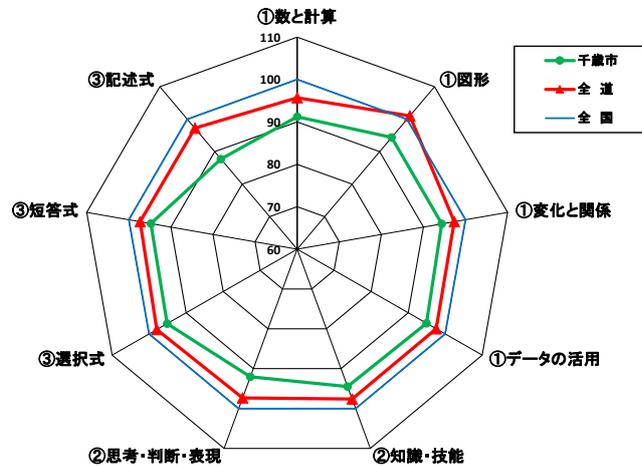


正答数の少ない層の割合は、全国より4.2ポイント高い状況である。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。

【区別正答率の経年変化】



【区別集計結果】



「数と計算」では、日常生活の場面を解釈し求め方と答えを式や言葉を用いて記述する問題、加法と乗法の混合した整数の計算をしたり分配法則を用いたりする問題、「以上」の意味を理解し表から必要な数を読み取る問題で正答率が低く、領域全体の低下に影響した。「図形」では、高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大きさを判断し、その理由を言葉や数を用いて記述することに課題がある。「変化と関係」では、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを式や言葉を用いて記述する問題、百分率の問題の正答率が低かった。「データの活用」では、二次元の表から、条件に合う数を読み取る問題が全国を超えたものの、「以上」の意味を理解し、示された表から必要な数を読み取る問題の正答率が低かった。問題形式においては、いずれも全国平均に達していない状況である。特に、「記述式問題」は全国正答率との差が大きい。

学習指導にあたっては、基本図形の面積の公式の理解にとどまらず、底辺と面積の関係を基に面積の大きさを判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる等、公式を活用できるようにすることが重要である。図形の観察や操作活動などを通して、図形を構成する要素や構成する要素の間の関係に着目して、図形の意味や性質を考える活動の充実が求められる。「数と計算」領域では、問題の解決方法を式や言葉を用いて説明する活動が重要である。

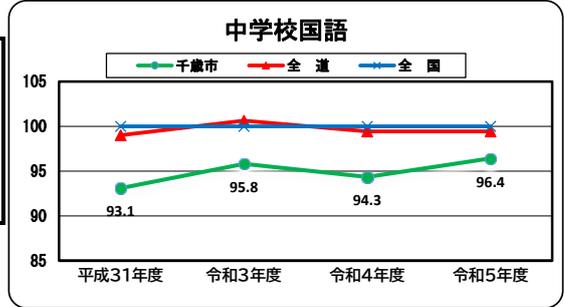
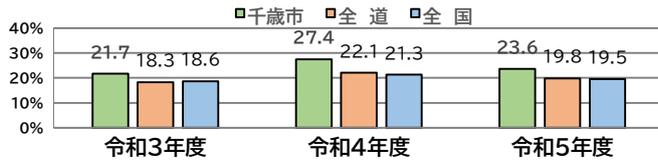
(5) 中学校国語

平均正答率は、今回、全国との差が縮まり、前回の「やや低い」から「ほぼ同様（下位）」の状況となった。領域別では、知識・技能「言葉の特徴や使い方に関する事項」が前回を下回り、全国との差が広がったが、他の領域は前回を上回り、全国との差を縮めた。

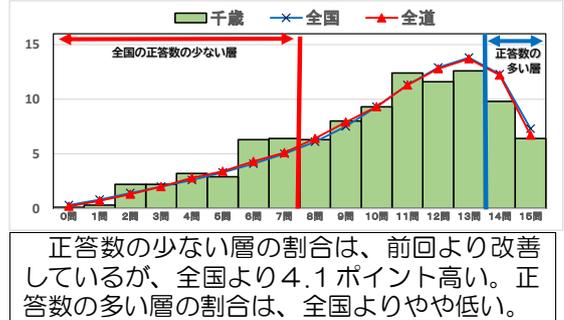
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成31年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
千歳市	67.8	61.9	65.1	67.3
	93.1	95.8	94.3	96.4
全道	72.1	64.5	68.6	69.4
	99	100.6	99.4	99.4
全国	72.8	64.6	69.0	69.8
	100	100	100	100

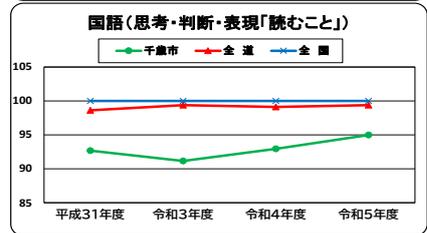
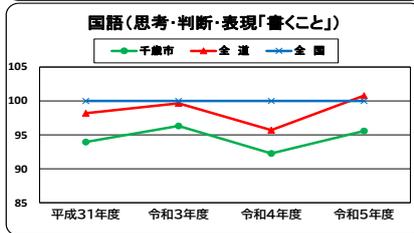
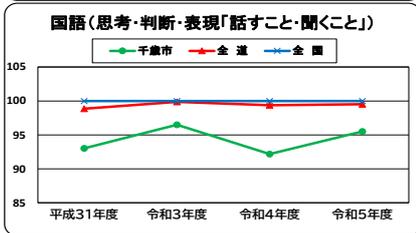
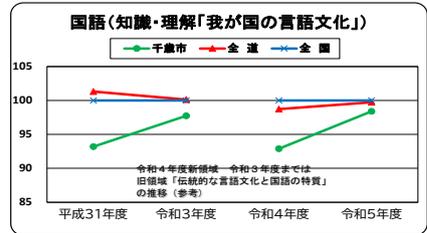
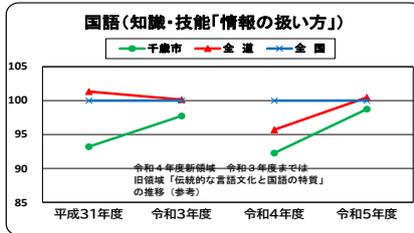
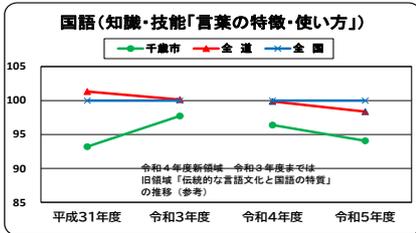
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



【正答数分布】



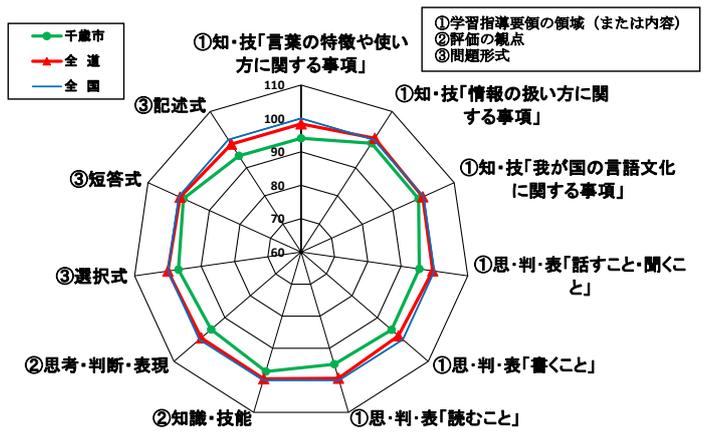
【区分別正答率の経年変化】



「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、漢字「推し」を正しく書くことが全国の正答率を下回った。「情報の扱い方に関する事項」では、具体と抽象など情報と情報との関係についての理解が全国同様であった。「我が国の言語文化に関する事項」では、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題が全国を上回ったものの、文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする問題は全国を下回った。「話すこと・聞くこと」では、話の内容を捉え、知りたい情報に合わせて効果的に質問する問題、目的に沿って自分の考えをまとめる問題が全国を下回った。

「書くこと」では、自分の考えが伝わる文章になるように根拠を明確にして書くことに課題がある。「読むこと」では、文章の中心的部分と付加的な部分について叙述を基に捉え要旨を把握することに課題がある。問題形式においては、「記述式問題」は前回を上回ったが、依然として全国の正答率との差が大きい。「選択式問題」「短答式問題」の正答率は全国をやや下回った。

【区分別集計結果】



学習指導にあたっては、文脈に即して漢字を正しく書く活動、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く活動などの充実が求められる。情報と情報との関係について理解し、実際の場面で活用できるように指導することが大切である。

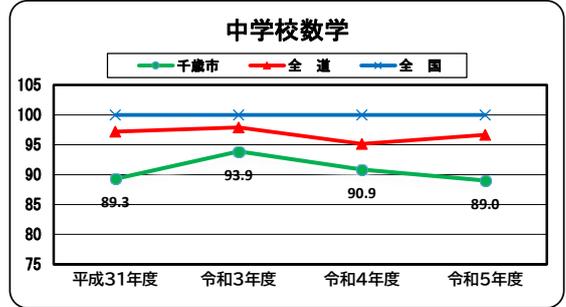
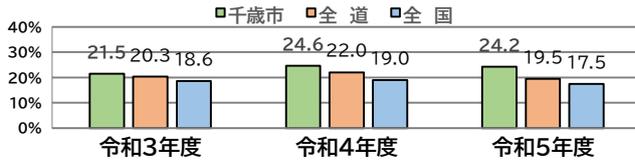
(6) 中学校数学

平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「やや低い」から「低い」状況となった。領域別では、「数と式」が前回を上回り、全国との差を縮めた。他の領域は前回を下回り、全国との差が広がった。特に、「図形」「データの活用」は激しく落ち込んだ。

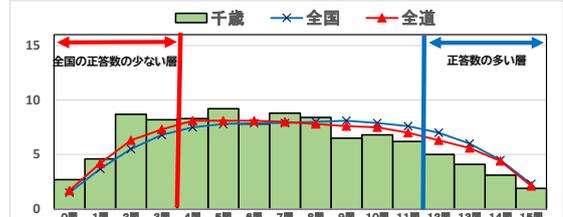
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成31年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
千歳市	53.4	53.7	46.7	45.4
	89.3	93.9	90.9	89.0
全道	58.1	55.9	48.9	49.3
	97.2	97.9	95.1	96.7
全国	59.8	57.2	51.4	51.0
	100	100	100	100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

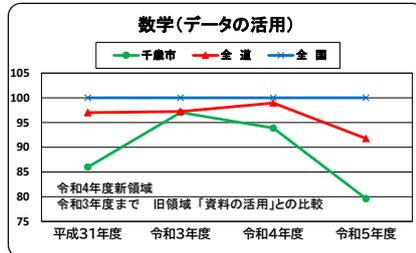
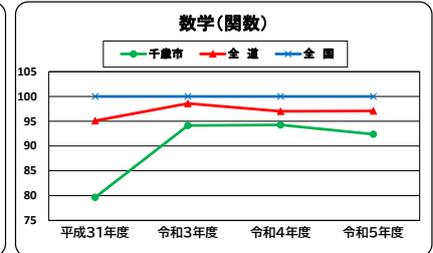
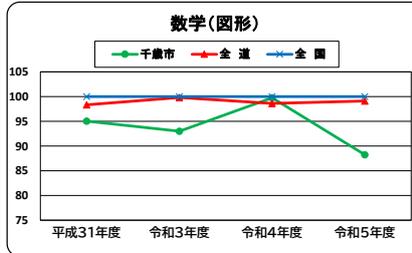
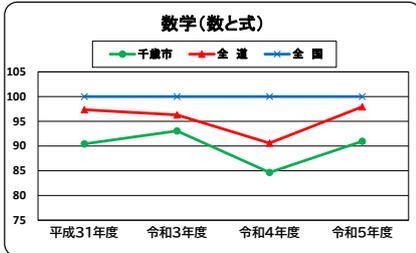


【正答数分布】

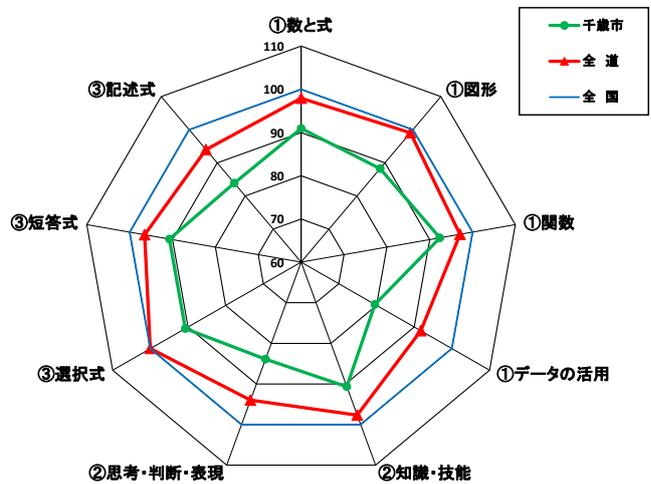


正答数の少ない層の割合は、全国より6.7ポイント高い状況で、今回はかなり高い。正答数の多い層の割合は、全国より低い状況となっている。

【区分別正答率の経年変化】



【区分別集計結果】



「数と式」では、事柄が成り立つ理由を説明する、成り立つ事柄を見だし説明する等の記述問題に課題があるが、正の数と負の数の計算は全国同様となった。「図形」では、空間における直線や平面の位置関係の理解に課題があり、さらに、平行線や角の性質を基に、図形を考察し証明する問題、証明を振り返って読み取る問題が全国を下回った。「関数」では、表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることに課題がある。「データの活用」では、四分位範囲の意味理解は全国同様であったが、日常生活や社会の事象を考察する場面において、複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、ある事柄が成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明する問題及び累積度数の意味理解の問題の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。問題形式においては、「記述式問題」「選択式問題」のいずれも全国との差が大きい。

学習指導にあたっては、証明を振り返り、証明に用いた前提や根拠を整理するなどして、図形の性質を論理的に考察し表現する活動（ある事柄の条件を変えた場合について考察する等）や、問題解決の過程や結果を振り返って考察する活動（新たに成り立ちそうな事柄を予想する等）の充実が求められる。また、基礎的・基本的な計算技能の定着を図ることも大切である。

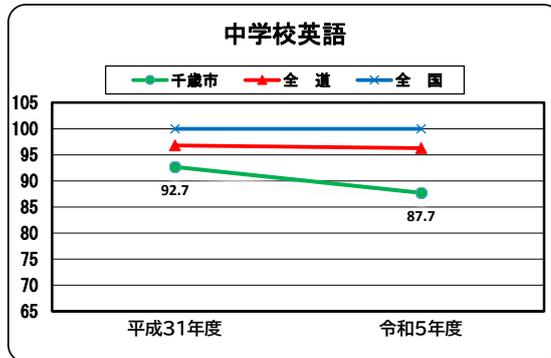
(7) 中学校英語

平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「やや低い」から「低い」状況となった。全領域が全国を下回り、特に、「書くこと」は全国との差が大きい。

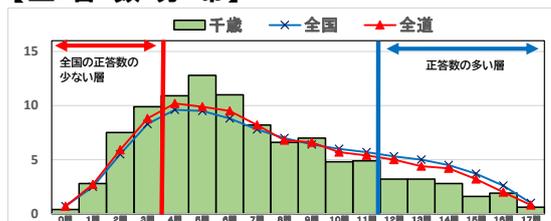
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成31年度	令和5年度
千歳市	51.9 92.7	40 87.7
全道	54.2 96.8	43.9 96.3
全国	56 100	45.6 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

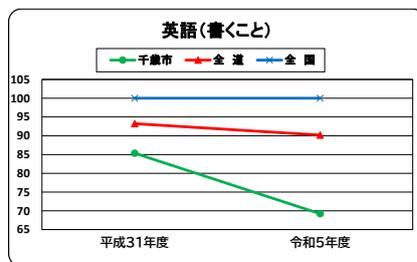
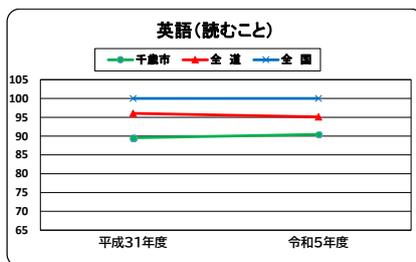
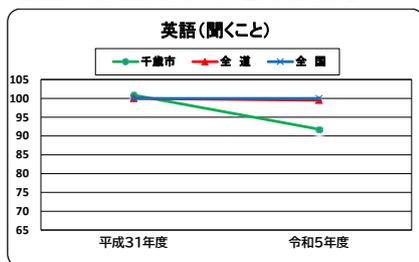


【正答数分布】



正答数の少ない層の割合は、全国より0.7ポイント高い状況である。正答数の多い層の割合は、全国よりかなり低い状況となっている。

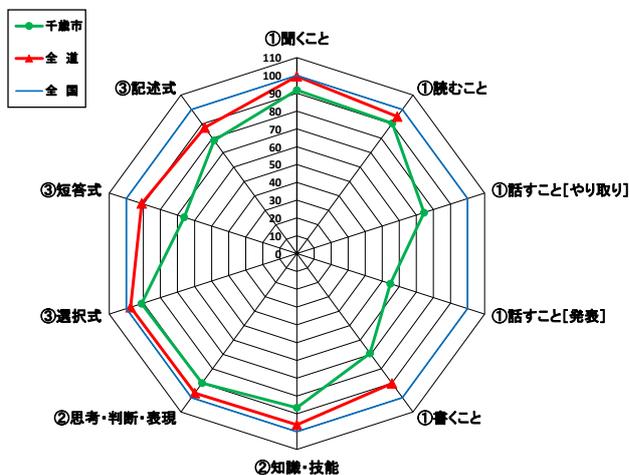
【区別正答率の経年変化】



「聞くこと」は、平均正答率が他の領域よりも高かったが、情報を正確に聞き取る問題の正答率が低く、全国の正答率を下回った。「読むこと」は、文と文との関係を読み取る問題の正答率が全国平均を大きく上回ったが、短い文章の要点を捉えることや自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取ることに課題があり、前回をわずかに上回るにとどまった。「書くこと」では、「与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、会話が成り立つように英文を完成させる」という短答式問題（2問）の正答率が低く、領域全体の低下に影響した。問題形式においては、「選択式問題」に比べ、「記述式問題（2問）」「短答式問題（3問）」は全国の正答率との差が大きい。

「話すこと」は、平均正答数が千歳市 0.5/5 問、全国 0.6/5 問で、平均正答率が[やり取り] 4問、千歳市 10.8%、全国 14.5%、[発表] 1問、千歳市 2.3%、全国 4.2%となった（「話すこと」の正答率等は、すべて推計値）。

【区別集計結果】



学習指導にあたっては、音声や語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解させ、これらの知識を、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付け、正確に書くことができるようにすることが重要である。そして、読む目的に応じて、要点を捉えた上で、内容に対する感想や賛否、自分の考えなどを話したり書いたりして表現するなど、領域を統合した言語活動を行うことが求められる。また、読み手として主体的に考えたり、判断したりしながら理解したことを基に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて適切に表現することができるようにすることも重要である。

(8) 国語、算数・数学の記述式問題について

千歳市の課題である「読解力・記述力」に関連性が高い「記述式問題」についての現状をまとめた。いずれも、評価の観点は「思考・判断・表現」である。

全国比：全国平均を 100 とした指数

学校数：全国平均を上回った市内の学校数（児童生徒数 10 名以上の学校を対象、小学校 1 4 校、中学校 6 校）

問題番号	小学校国語			小学校算数			
	1 二	2 四	3 二	1(3)	2(4)	3(2)	4(3)
内容	書くこと	読むこと	話すこと・聞くこと	変化と関係	図形	数と計算	データの活用
正答率(%)	21.4	54.2	72.6	47.9	16.1	49.1	53
全国比	80.1	96.4	103.4	86.3	77.4	86.6	94.3
学校数	2	6	10	3	2	3	7

国語では、インタビューをする場面で「あなたが谷さんだったら、どのように話しますか」という設問【3 二】で、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができていた。設問【1 二】「学校の米作りの問題点とその解決方法について、あなたが川村さんなら、どのように書きますか」では、学校の米作りの問題点について、グラフから分かることか、カードから分かることかのいずれかしか書いていない誤答が多かった。出題文から書くべき内容が「学校の米作りの問題点」「その解決方法」であることを捉えることができなかつたり、図表やグラフなどから分かることを関係付けて捉えることができなかつたりした点も課題である。正確に読み取ったり、論理的に思考したりすることができるよう指導する必要がある。

算数では、無解答率が低く、意欲的に取り組んでいる様子が見られた。2つのグラフを比較する設問【4(3)】は正答率が高かった。図形に関する設問【2(4)】「二つの三角形の面積の比較」で、二つの三角形の面積が等しいと判断できている解答が 31.8%にとどまり、そのうち半数が理由を言葉や数を用いて正しく記述することができなかつた。また、高さについて具体的な長さが示されていないため面積が比較できないことを書いている誤答も多かつた。根拠を明らかにして説明する活動が重要であり、授業において意図的に設定する必要がある。

問題番号	中学校国語				中学校数学				
	1 四	2 四	3 四	4 三	6(2)	6(3)	7(2)	8(3)	9(1)
内容	話すこと・聞くこと	読むこと	書くこと	読むこと	数と式	数と式	データの活用	関数	図形
正答率(%)	78.3	61.2	67.4	49.6	47.1	33.2	24.5	40	29.6
全国比	94.9	90.7	93.5	99.2	80.1	81.2	72.9	93.5	92.2
学校数	1	0	2	3	0	0	0	2	2

国語では、いずれも自分の考えを伝える「インタビューのまとめとしてどのようなことを述べるのか」という設問【1 四】、「どのように『判じ絵』の解説の仕方を説明するか」という設問【3 四】は正答率が高かつた。設問【4 三】については無解答率が高く、「読むこと」を通して**古典の楽しみ方を理解する**活動が大切になる。設問【2 四】「自分がこれからどのように本を読んでいきたいかについて、読んだ文章を参考にして、知識や経験に触れながら書く」では、条件イ「自分の読書に関する経験や知識に触れながら書く」を満たしていない誤答が多く見られた。文章を読んで理解したことを知識や経験と結び付けて、自分の考えを広げたり深めたりすること活動が十分に行われていないことが考えられる。国語の授業で、観点を明確にして**文章を比較すること**、話し手と自分の考えを比較したり、関連付けたりすることが重要となってくる。

数学では、一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し表現する設問【8(3)】、2本の直線が平行になることを証明する設問【9(1)】は正答率全国比が高かつた。**自然数 n を用いた式を使って説明する**設問【6(2)】、結論は変えずに成り立つ事柄にするためには前提をどのように変えればよいのかを数学的に説明したりする設問【6(3)】では、 n を用い事象を一般化した式を変形したり、その意味を読み取って説明したりすることに課題が見られた。また、データの分布の傾向を読み取って判断し、その理由を数学的な表現を用いて的確に説明する設問【7(2)】では、箱ひげ図の読み取りに課題が見られた。不確定な事象についてデータに基づいて考察する場合、平均値、中央値だけでなく**四分位範囲や箱ひげ図を用いる**ことが重要となる。

3 児童生徒質問紙の結果

令和5年度の調査では、国語に関する質問項目が増え、算数・数学に関する質問項目が減っている。また、英語に関する質問が復活している。今回は、「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等」「学習習慣、学習環境等」「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況」「学習に対する興味・関心や授業の理解度等」の4観点で小・中学校別に示した。

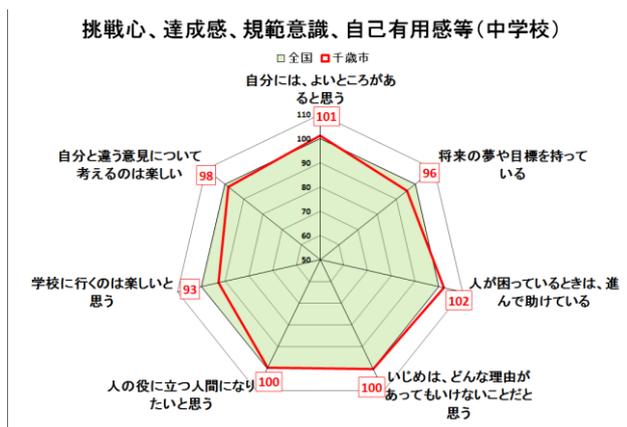
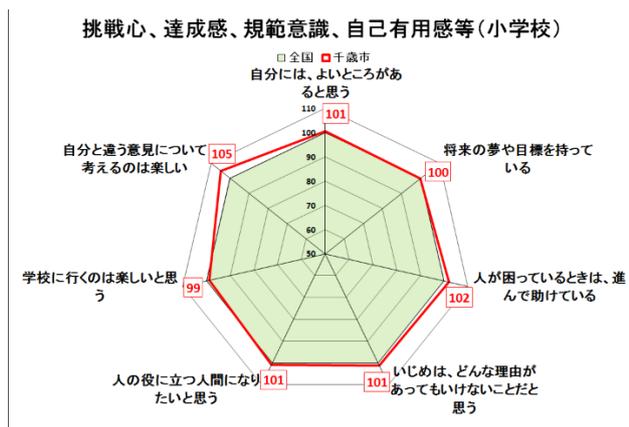
「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等」の観点において、昨年度まで「地域とのかかわり」についての項目があったが、コロナ禍が収束しつつある今回の調査では、回復傾向にあり、全国平均とほぼ同じレベルに達しているため、あえて掲載しなかった。新たに、「学校に行くのは楽しいと思う」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という2項目に特徴があったため、付加した。

「学習習慣・学習環境等」の観点において、今回は、メディアに触れる機会についての調査がなくなっている。学習時間については、千歳市PTA家庭生活宣言とタイアップしていることを考慮し、小学校6年生の家庭学習時間の目標が70分以上なので「1時間以上」、中学校3年生の家庭学習時間の目標が100分以上なので「2時間以上」で結果を示した。読書については、昨年度まで「10分以上」の結果を示したが、読書の質を高めるためには「30分以上」が妥当と考え変更している。

今回、授業改革を進めるうえで、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況」という観点を新たに加えた。さらに、ICTの活用は、授業改善を進めるうえで不可欠と考え、活用状況を示した。

「学習に対する興味・関心」については、国語、算数・数学、英語でおおむね共通した項目で質問項目が作成されている。

(1) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

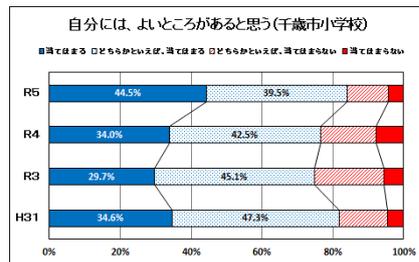


① 小学校

規範意識の醸成が進み、自己有用感が向上傾向にある

ほとんどの項目において向上傾向が見られ、全国平均とほぼ同様のレベルにある。「自分にはよいところがある」と回答した児童の割合が高まっており、全国平均と同レベルに達した。

「学校に行くのは楽しいと思う」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という項目では、大きく向上している。



過去4年間の経年変化(千歳市小学校)

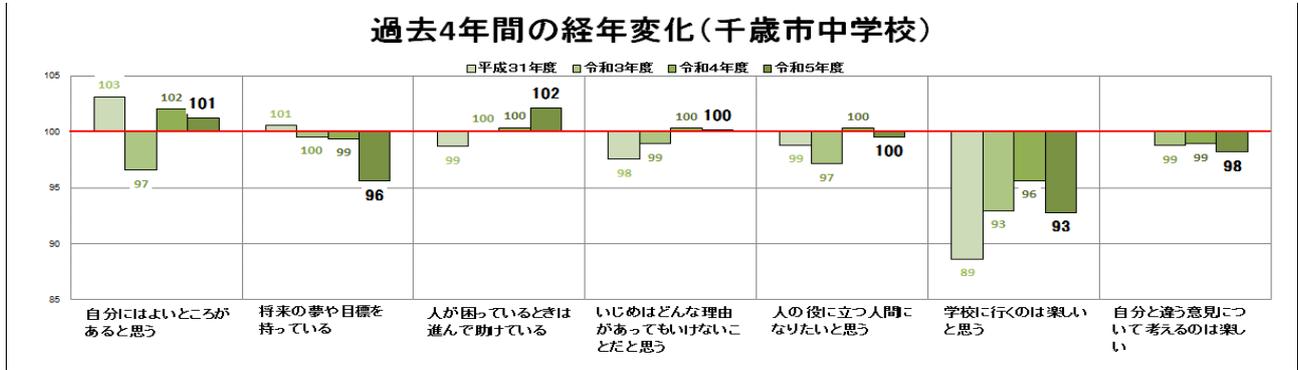
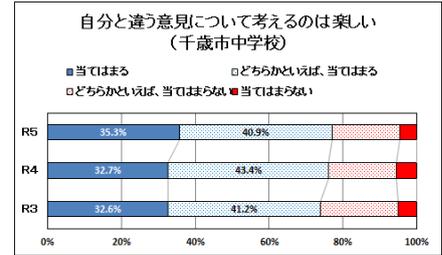


② 中学校

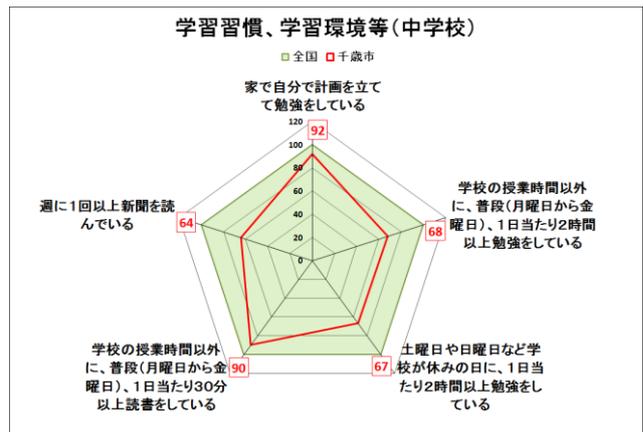
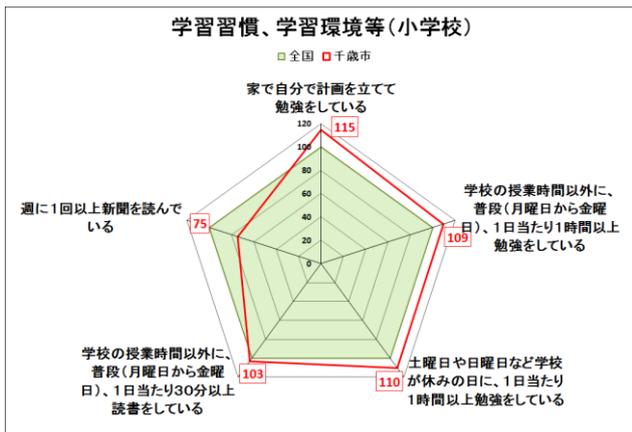
標準的であるが、挑戦心、自己有用感がやや低下傾向にある

多くの項目において、全国平均とほぼ同様のレベルにあるが、「将来の夢や目標を持っている」「学校に行くのは楽しい」という項目は、やや低下傾向にある。

「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という項目では、全国平均と比較すると低下傾向にあるが、「楽しい」と感じている生徒の割合は増加傾向にある。



(2) 学習習慣、学習環境等

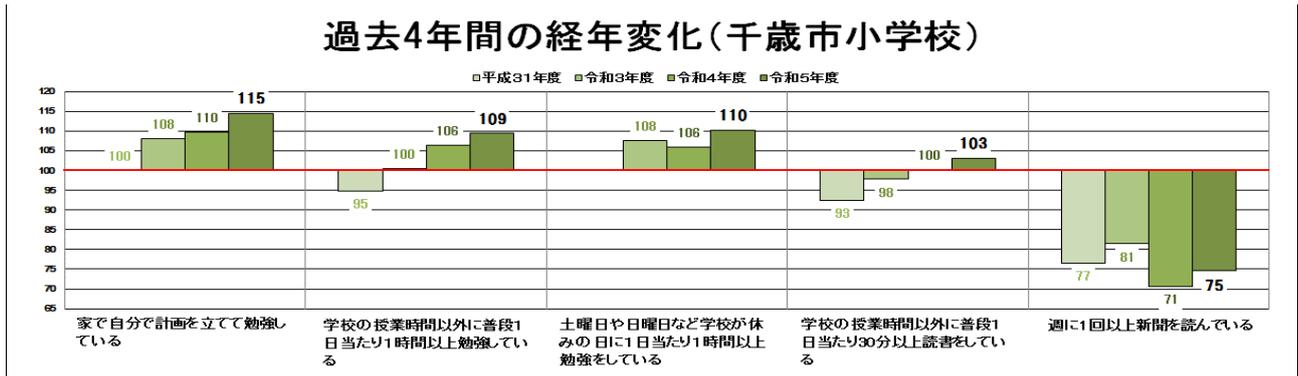
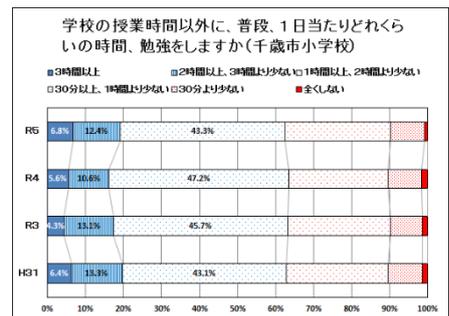


① 小学校

学習習慣も着実に身につけており、読書の質も高まっている

家庭学習をする児童が確実に増えており、全国平均より高いレベルにある。千歳市PTA家庭生活宣言の「学年×10分+10分」が定着してきたことがうかがわれる。2時間以上学習する児童も増加傾向にある。

30分以上読書する児童も増加傾向にあり、読書の質の高さが表れてきている。新聞をとる家庭が少なくなっていることから、学校での取組が必要になっている。

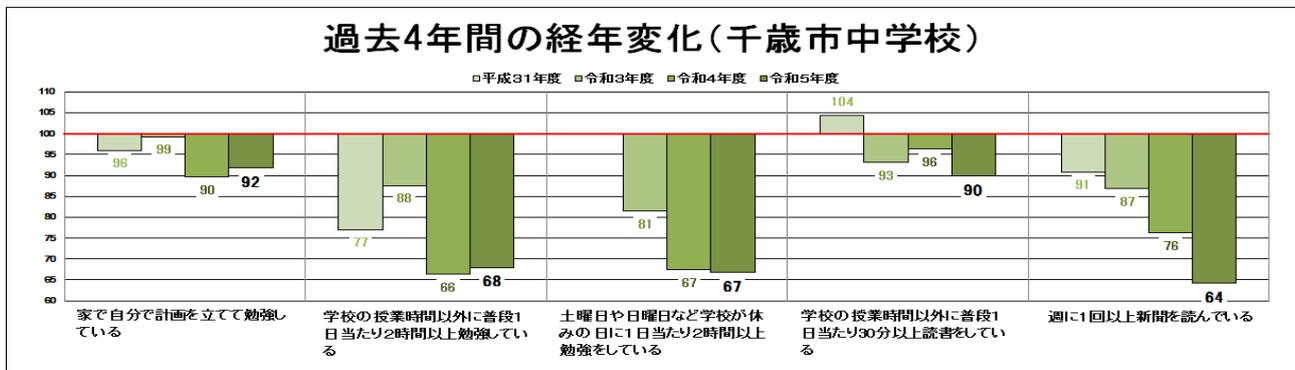
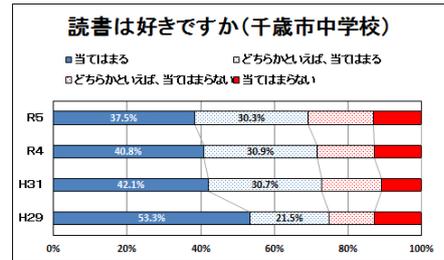
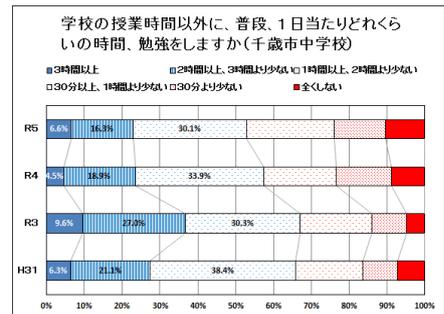


② 中学校

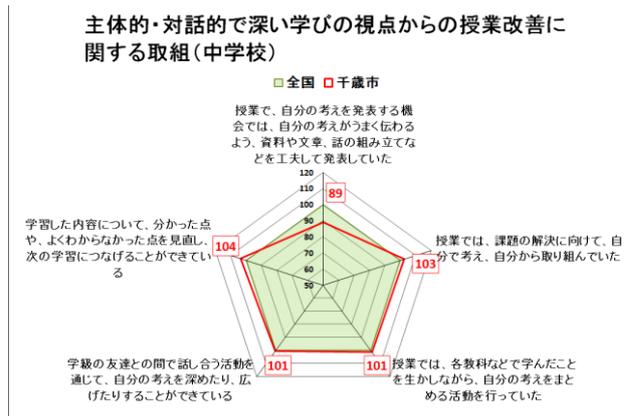
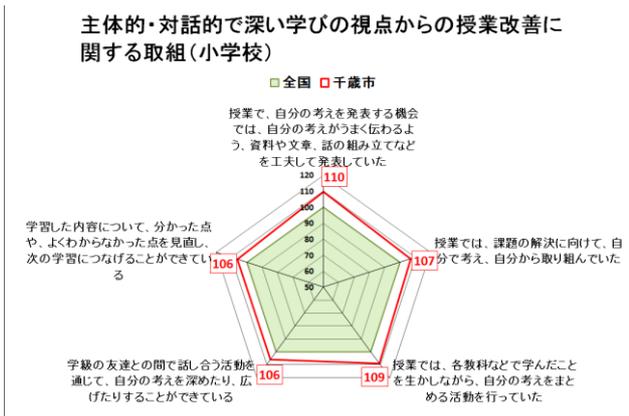
低下傾向が続いており、「家庭学習に取り組もうとする姿勢」を身に付けさせる工夫が必要である

家庭学習に取り組んでいる生徒の割合が低下しており、全国平均よりかなり低いレベルにある。各学校では、千歳市PTA家庭生活宣言を受け、「中学生としての習慣をつくる」取組として、スケジュール帳をつくり、時間の管理ができるように取り組んでいます。その成果が徐々に表れつつあるが、「全くしない」と回答している生徒も増加しており、二極化の状況が続いている。

家庭におけるアウトメディアの取組が進まない影響からか、読書離れも加速しており、30分以上読書する生徒が減少している。また、スマホ等の普及により、新聞以外から情報を得る環境が整い、新聞を読む機会が極端に減ってきている。動画による情報が多くなり、語彙力の低下が危惧される。学校で読書環境や新聞閲覧環境を整えるだけでなく、読書や新聞を読むことを家庭学習の一つとして位置付ける等の工夫が必要である。



(3) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

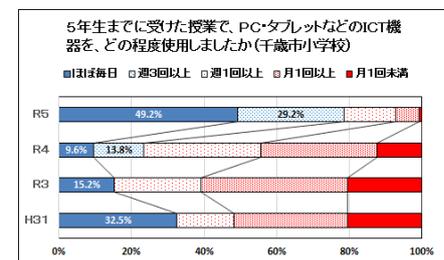


① 小学校

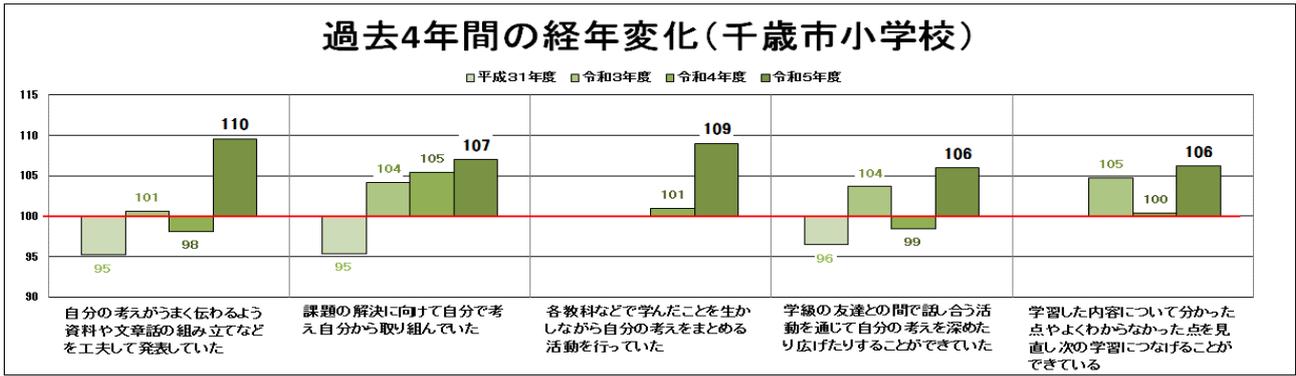
主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善が着実に進んでいる

全ての項目が、全国平均を上回っている。特に、「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表」することは、高いレベルにある。

昨年度、全ての小学校で、一人1台のタブレットの配付が完了し、活用率も高まり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実も図られてきている。さらに、カリキュラム・マネジメントの取組



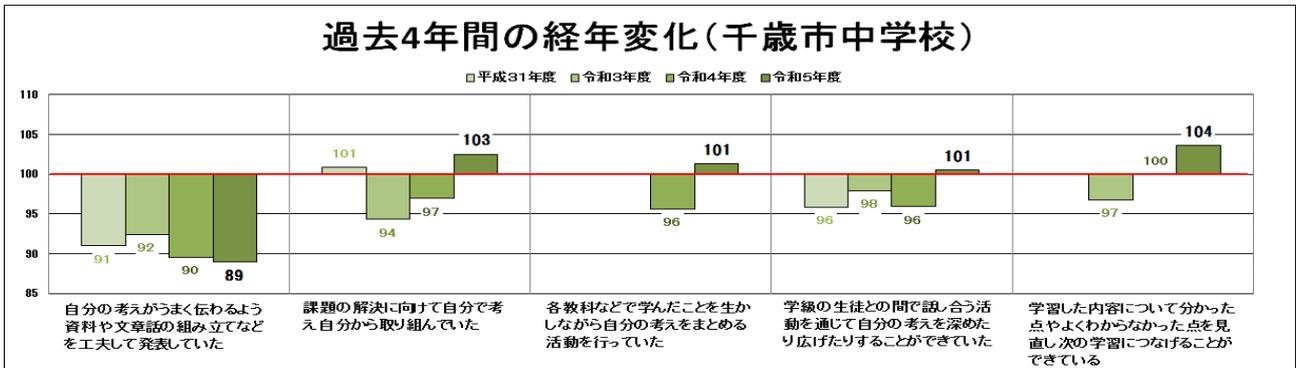
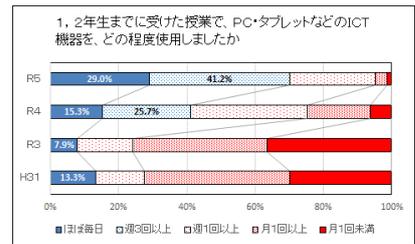
を一層進めることで、児童の資質・能力の向上に結びつくことが期待される。



② 中学校

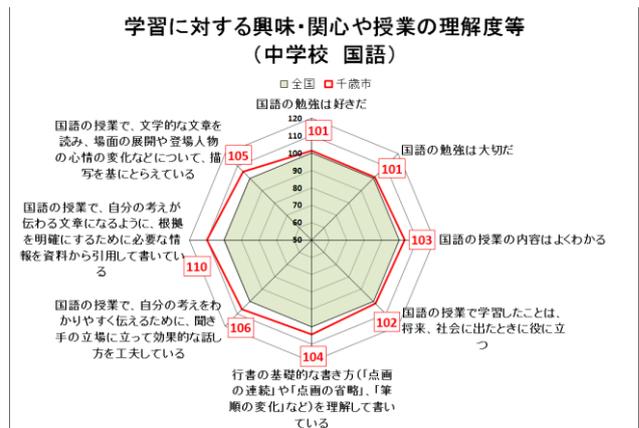
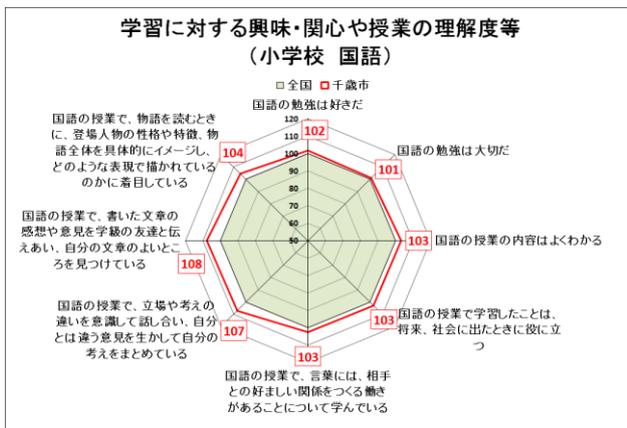
主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善が着実に進んでいる

ほとんどの項目が向上傾向にあり、全国平均と同じレベルに達してきた。「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表する」ことがやや低下傾向にあるため、相手の反応を見ながら発表する機会を増やすなどの工夫が必要である。

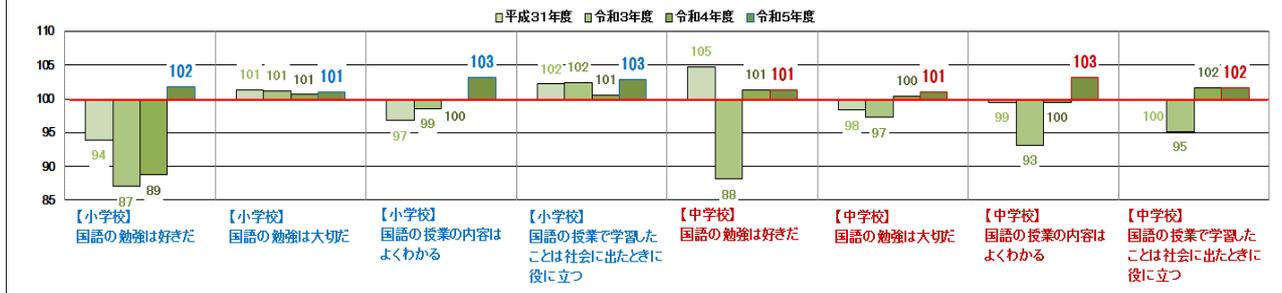


(4) 学習に対する興味・関心や授業の理解度等

【国語】



過去4年間の経年変化

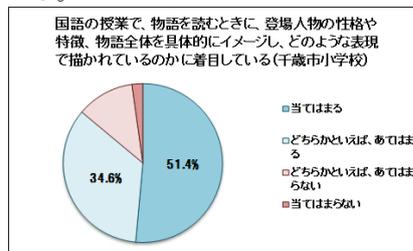
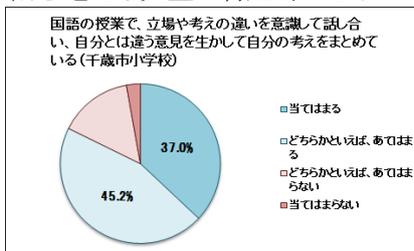
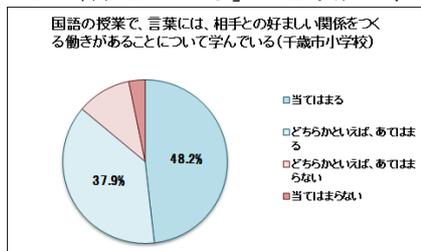


① 小学校

「国語の勉強は好き」という児童が大きく増加している

国語に対する興味・関心に関しては、標準的であるが、全ての項目で全国平均を上回っている。特に、「国語の勉強が好きだ」という項目は、大きく向上している。主体的・対話的で深い学びを実現する授業が着実に進められてきたことが、児童の意識の高まりにつながっていると考えられる。

授業の理解度については、「言葉には、相手との好ましい関係をつくる働きがあることについて学んでいる」「立場や考えの違いを意識して話し合い、自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめている」「物語を読むときに、登場人物の性格や特徴、物語全体を具体的にイメージし、どのような表現で描かれているのかに着目している」の3項目で、8割を超える児童が肯定的にとらえている。

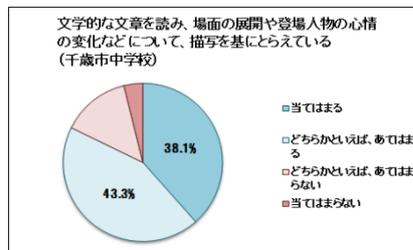


② 中学校

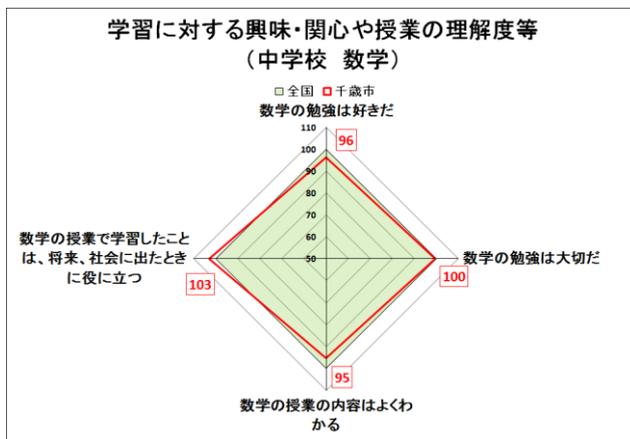
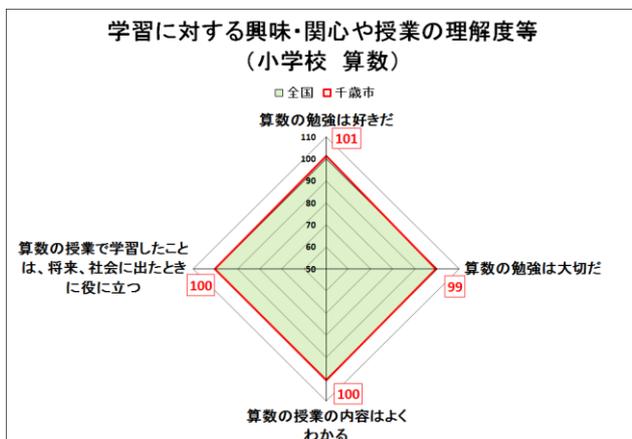
国語の授業の理解度が高まってきている

国語に対する興味・関心に関しては、標準的であるが、全ての項目で全国平均を上回っている。特に、「国語の授業の内容はよくわかる」という項目は、向上傾向にある。主体的・対話的で深い学びを実現する授業が着実に進められてきたことが、理解力の高まりに結びついている。

授業の理解度については、「文学的な文章を読み、場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基にとらえている」の1項目で、8割を超える生徒が肯定的にとらえている。



【算数・数学】



過去4年間の経年変化



① 小学校

「算数の勉強は好き」という児童が増加傾向にある

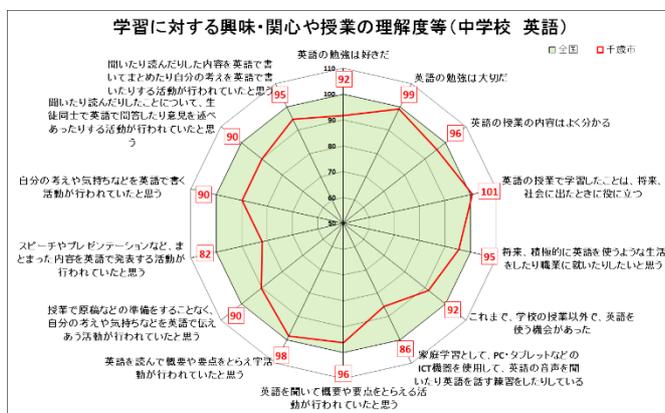
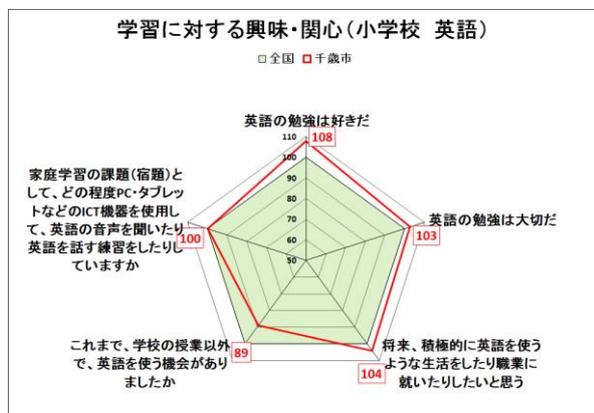
算数に対する興味・関心に関しては、標準的である。特に、「算数の勉強は好きだ」という項目は、着実に向上傾向にある。今後も、学習支援員を活用した習熟度別学習のよさを生かすとともに、ICTを効果的に活用しながら、主体的に問題解決に取り組む授業を工夫し、理解度を高めていくことが大切である。

② 中学校

「数学の勉強は好き」という生徒が増加傾向にあるので、さらに理解度を高める授業改善が必要である

数学に対する興味・関心については、標準的である。「数学の勉強は好きだ」と回答している生徒が増加傾向にあるが、「数学の授業の内容はよくわかる」と回答している生徒が減少している。理解度を高めるために、解き方や考え方を書くだけでなく、ICTを活用して協働的な学習を進めることで、筋道を立てて考える力、言葉や数・式を使って数学的に表現できる力を高めていく必要がある。

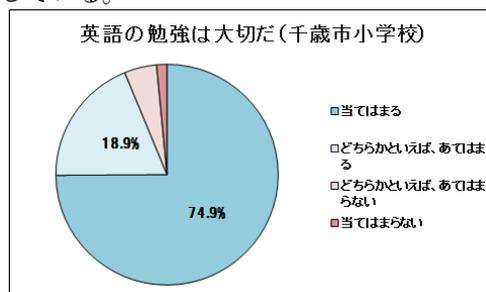
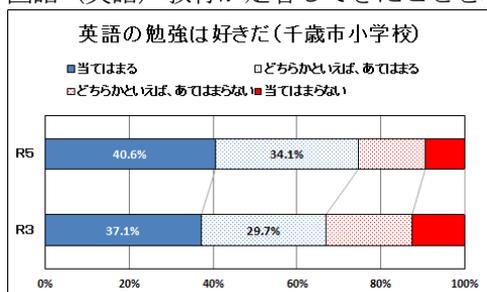
【英語】



① 小学校

外国語（英語）の有用性を感じている児童が増加している

英語に対する興味・関心については、おおむね標準的である。前回の調査と比較すると、「英語の勉強は好き」と回答した児童が大きく増加している。また、「英語の勉強は大切だ」と思っている児童は9割を超えている。小学校における外国語（英語）教育が定着してきたことを示している。

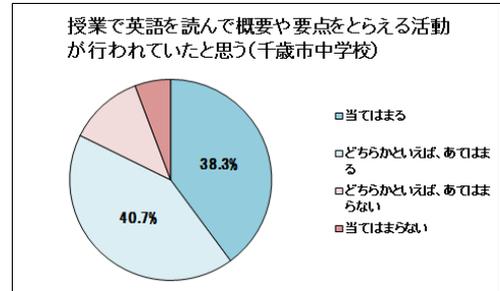


② 中学校

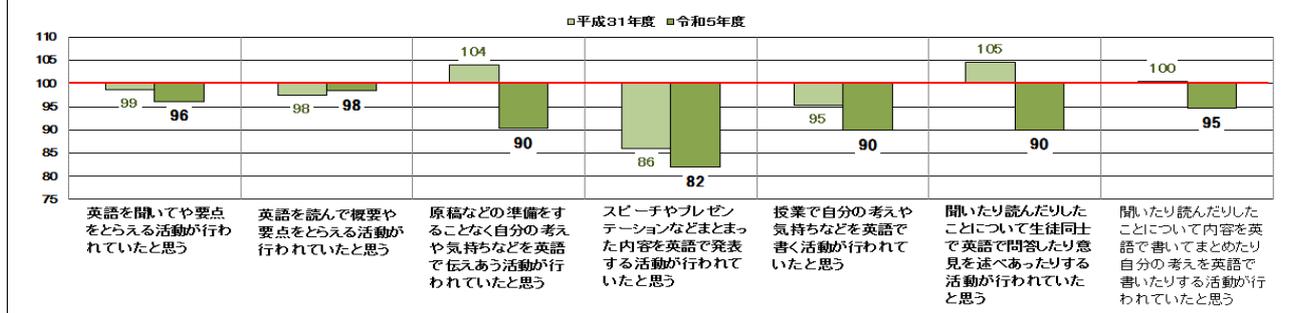
英語の有用性を感じてはいるが、理解度は低下傾向にある

英語に対する興味・関心については、「英語の勉強は大切だ」「英語の授業の内容はよく分かる」「英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」「将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思う」という項目では標準的であるが、「英語の勉強は好きだ」「学校の授業以外で、英語を使う機会があった」「家庭学習として、PC・タブレットなどのICT機器を使用して、英語の音声を聞いたり英語を話す練習をしたりしている」という項目では全国平均をやや下回っている。

授業の理解度等については、低下傾向にあり、全ての項目で全国平均を下回っている。その中で、「英語を読んで概要や要点をとらえる活動が行われていたと思う」という項目では、やや向上傾向にある。今後は、「原稿などの準備をすることなく、自分の考えや気持ちなどを英語で伝えあう活動」「スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動」「自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動」「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べあったりする活動」を授業に積極的に取り入れていくことが必要である。



英語の授業に対する理解度等(千歳市中学校)

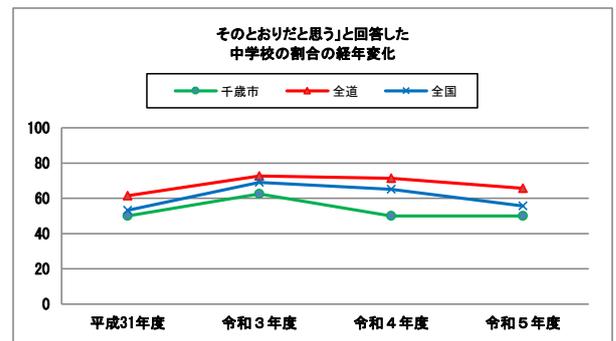
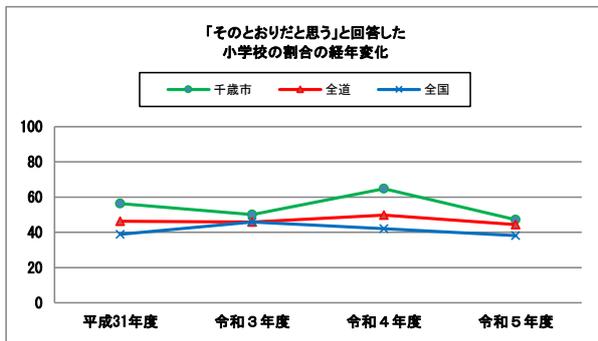
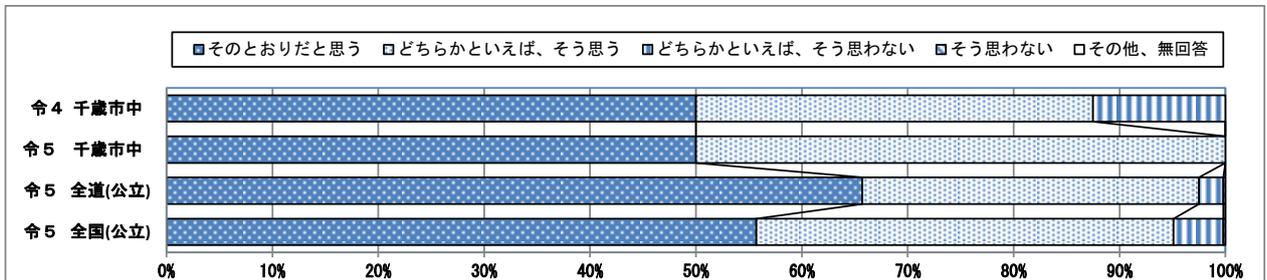
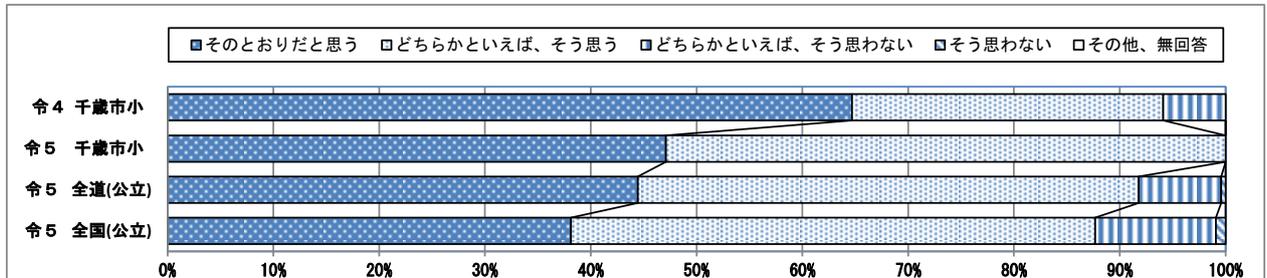


4. 学校質問紙の結果

1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

① 学習規律～落ち着いた学級

質問番号 9	調査対象学年の児童（生徒）は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。
-----------	--



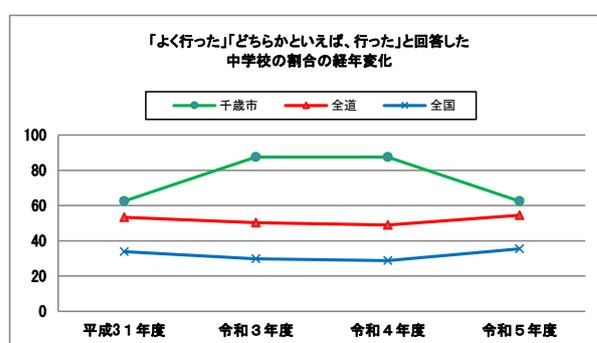
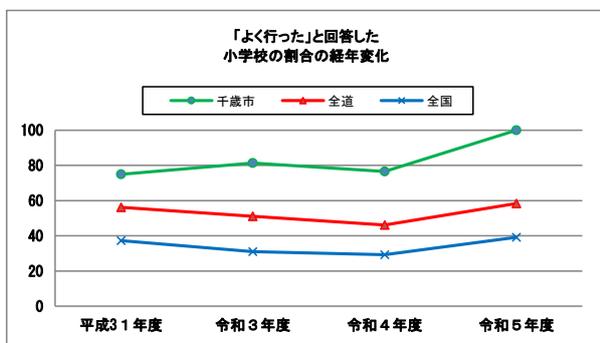
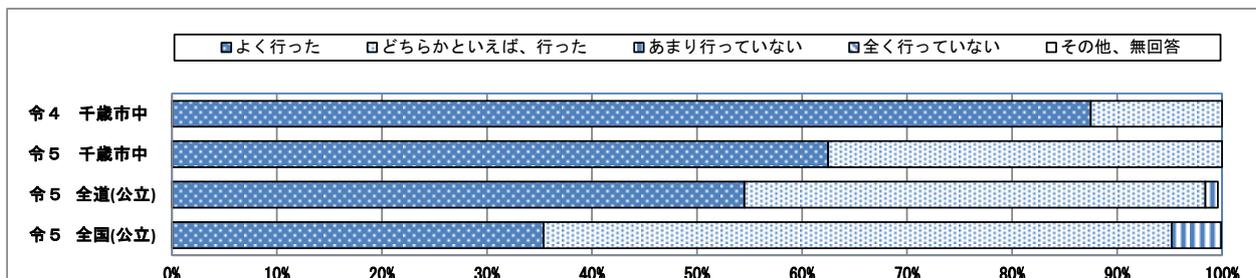
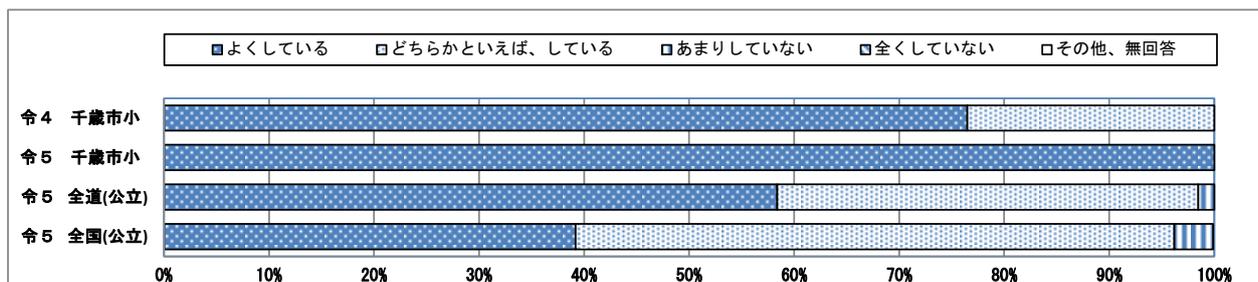
小学校は減少し、中学校は維持している

「そのとおりだ」と回答した学校の割合は、小学校は47.1%であり、全国（小38.1%）を上回っているが、減少している。中学校は昨年と変わらず50.0%であり、全国（中55.7%）を下回っている。小中ともに「そのとおりだ」「どちらかといえばそう思う」を合わせると100%となっている。

私語のない落ち着いた学習環境は学力向上の基盤である。規律ある生活を通じて、学習に集中できること、学ぶ楽しさを理解させることが大切である。また、学級替えや担任交代等に左右されないよう、校内で統一した取組を行う必要がある。更に、年に2回市内全校（北進小中学校を除く）統一で行っているハイパーQ U検査の結果分析から、学級の状態を客観的に把握するとともに、校内で結果を共有し、組織的な改善策をすすめることも重要である。

② 検証改善サイクルの確立

質問番号 19	児童（生徒）の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。
------------	---



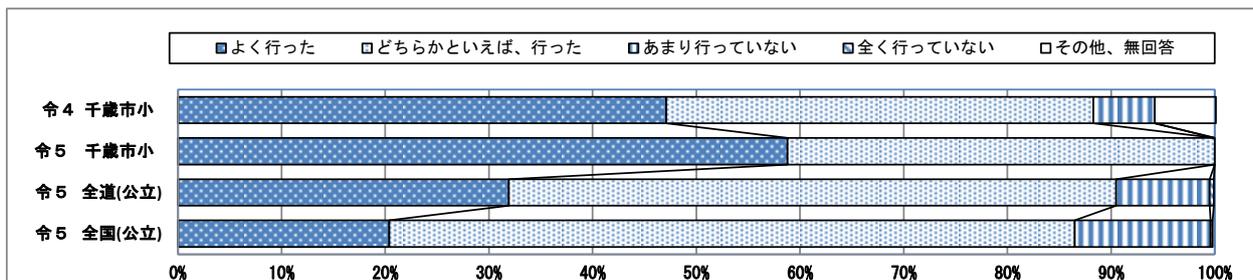
小・中学校ともに全国を上回る取組がなされている。

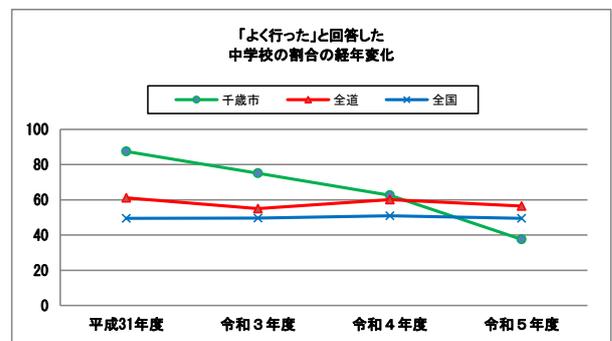
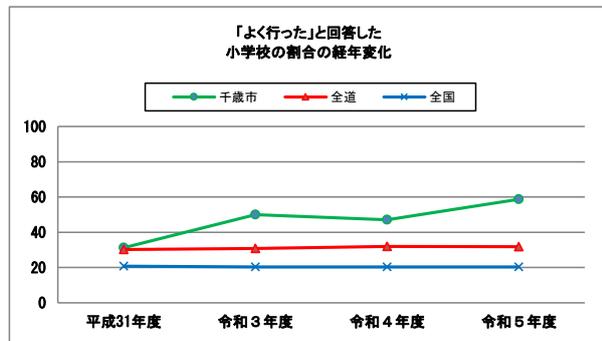
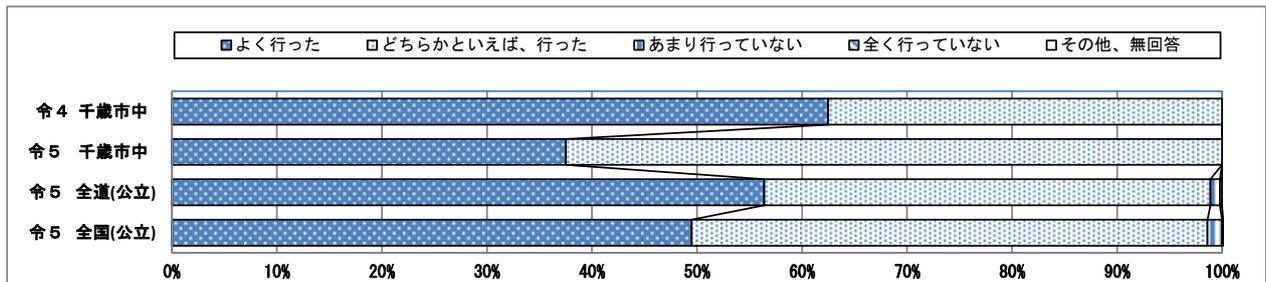
「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校は100%、中学校は62.5%と昨年より減少したが、全国（小39.23%、中35.4%）を上回る取組がなされている。

学力向上の取組を組織的、計画的に実行し、成果につなげるためには、計画、実施、評価、改善のサイクルの確立が必要である。全国学力・学習状況調査結果、市独自で実施しているNRT学力検査とハイパーQU検査の結果分析から課題を整理し、学校改善プランとして具体的な方策を全校一体となって実践をすすめるとともに、徹底した進行管理のもとで検証改善サイクルの確実な運用を図ることが大切である。立案した方策を全校で確実にすすめること、数値での客観的な成果把握をもとに、実施効果の低い取組を迅速に改善することが重要である。

③ キャリア教育

質問番号 11	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。
------------	---



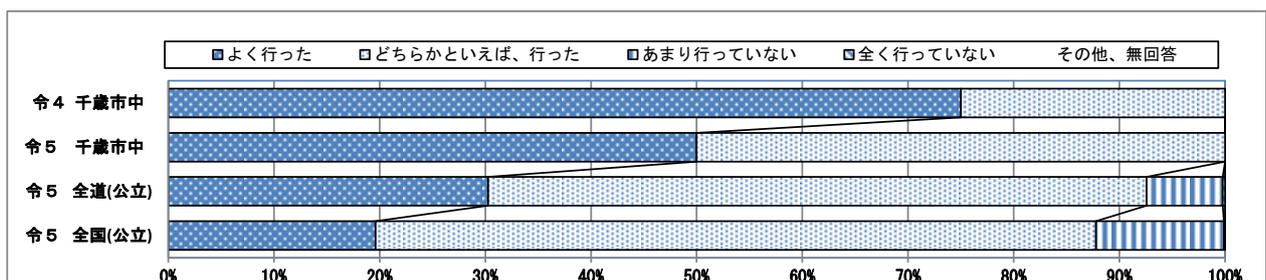
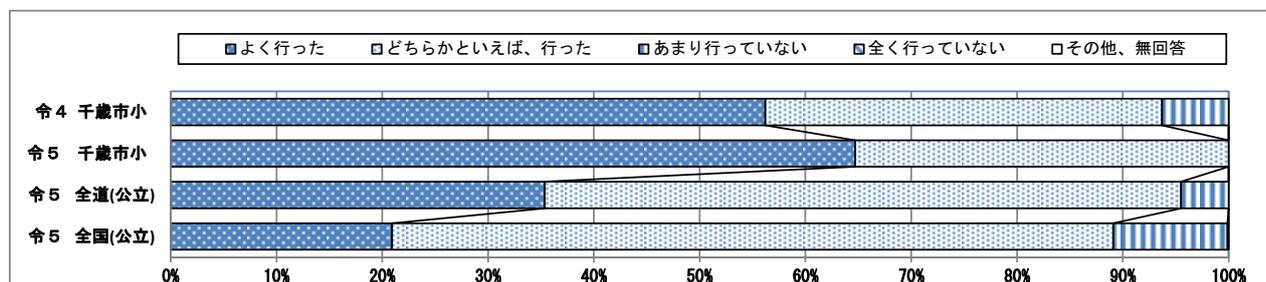


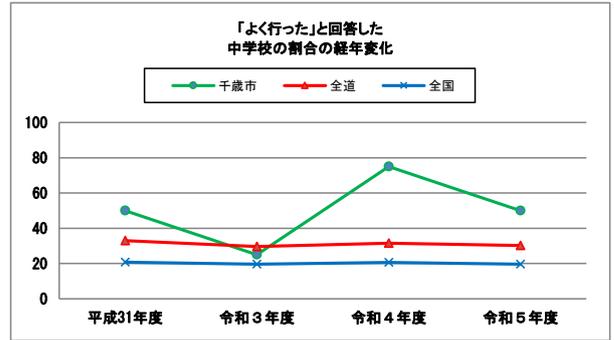
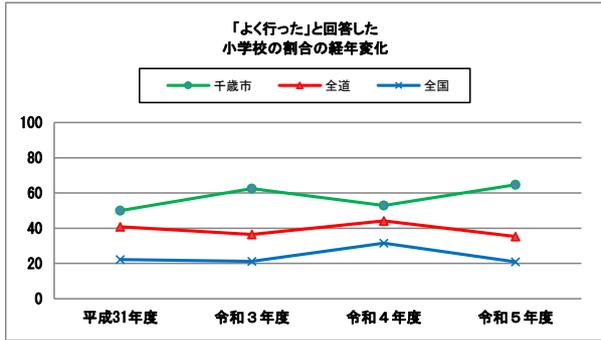
小学校は取組が増加し、中学校は減少している

「よく行った」と回答した小学校は58.8%であり、昨年を上回り、全国(20.4%)も上回っている。中学校は37.5%であり、昨年より減少し、全国(49.5%)も下回った。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を100とした指数で小学校においては102.8ポイント、中学校では92.4ポイントとなっている。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する指導については引き続き一層の充実を図る必要がある。コロナ禍により控えていたボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組が今後活発化されることが想定されることから、各学校においては特別活動の学級活動を要として全ての教育活動が児童生徒のキャリア形成につながっていることを踏まえ、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢、自己有用感を高め、夢や目標をもって自己実現を目指す姿勢を育てていくことが大切である。

④ 授業改善～発問や指導の工夫、習得・活用・探究の学習過程

質問番号 34	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。
------------	--





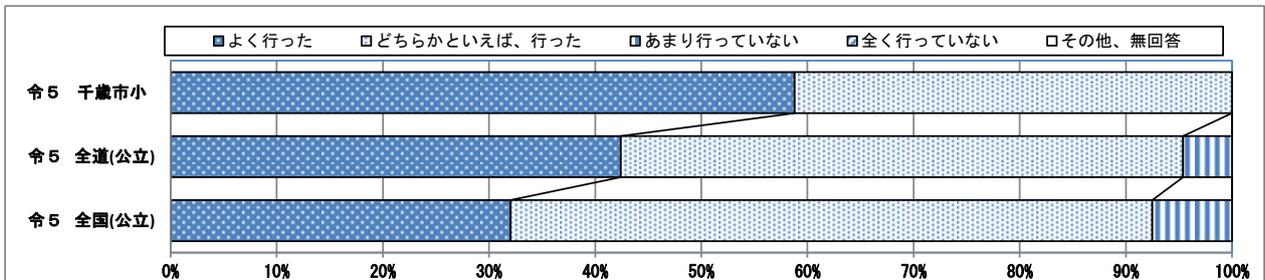
いずれも小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

「習得・探究の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫」を「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校は47.1%で全国（30.3%）を上回り、中学校においても50.0%と全国（19.6%）を上回っている。昨年との比較では小学校は11.8ポイント増加し、中学校は25.0ポイント減少した。

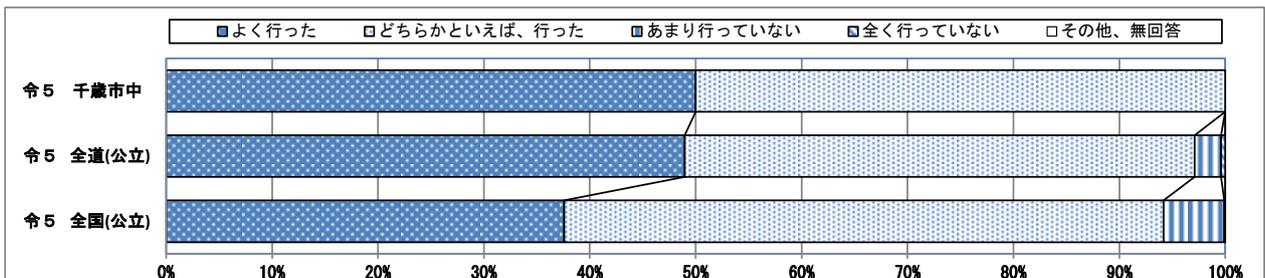
学校は、児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実が求められている。指導に当たっては児童生徒の様々な考えを引き出す発問や指導を工夫し、習得・活用・探究という学習サイクルの確立を図ることが「主体的・対話的で深い学び」を実現するポイントとなる。その際、児童生徒の実態によって、活用するための知識や技能が十分でない場合は、確実に習得させておくことが重要である。

⑤ 授業改善～国語、算数・数学の指導

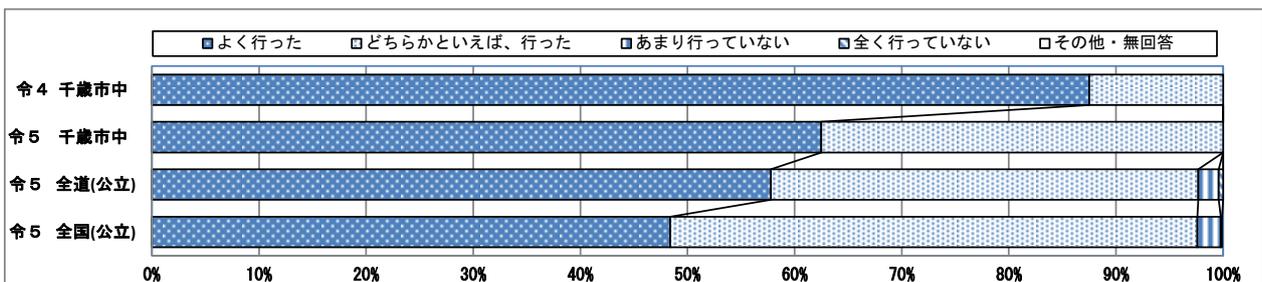
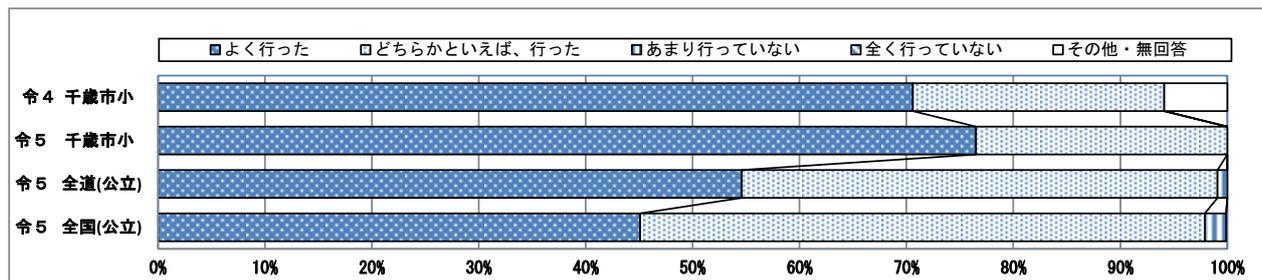
質問番号 小44 児童に対する国語の授業において、前年度までに、互いの書いた文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることができるような指導を行いましたか。



質問番号 中44 調査対象学年の生徒に対する国語の授業において、前年度までに、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にするために必要な情報を資料から引用して書くことができるような指導を行いましたか。



質問番号 4 8	調査対象学年の児童(生徒)に対する算数(数学)の授業において、公式やきまりなどを指導するとき、児童・生徒がそのわけ(根拠)を理解できるように工夫しましたか。
-------------	--



「根拠を明確にした表現、公式やきまりの根拠を理解させる授業」の充実が求められる

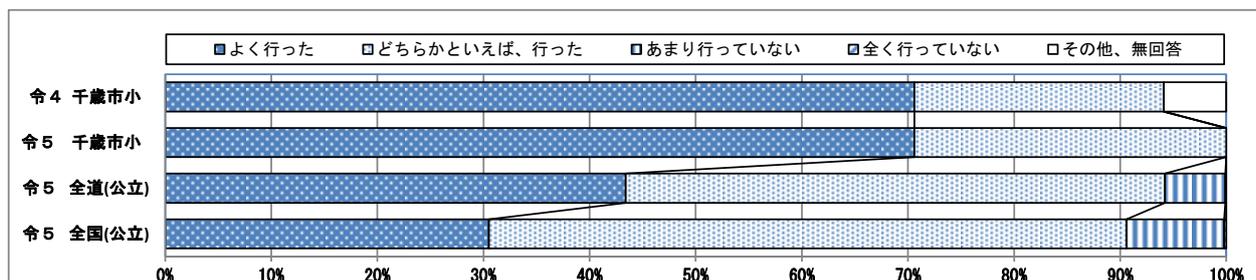
国語の「(根拠を明確にして) 考えを書いたり表現を工夫したりする授業」について、「よく行った」と回答した小学校は58.8%で、全国(32.0%)を16.8ポイント上回り、中学校は50.0%で全国(37.5%)を12.5ポイント上回った。相手を意識して筋道の通った文章を書く際には、理由(根拠)を明確にしながらか自分の考えを述べる必要がある。また、読み手が理解しやすいように、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりすることが大切である。そのためには、説明や考えを書く活動などを指導計画に位置付け、対話を通して互いの文章のよいところを伝えあい、自ら書いた文章を推敲する学習を繰り返し、書き直したものが読みやすくなったという実感の持てる指導が必要となる。

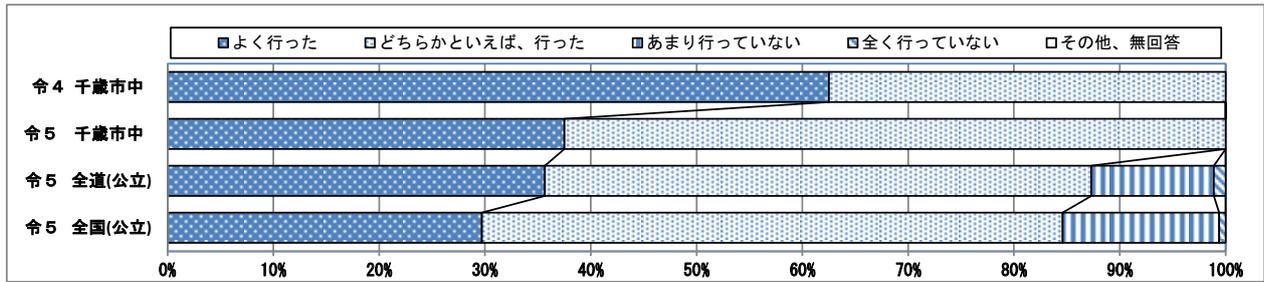
算数・数学の「公式やきまりを指導するとき、その根拠を理解できるように工夫した授業」について、「よく行った」と回答した学校は、小学校は76.5%で全国(45.1%)を31.4ポイント上回り、中学校は62.5%で全国(48.4%)を14.15ポイント上回っている。昨年との比較では、小学校は5.9ポイント増加し、中学校は25ポイント減少した。

ある事柄が成り立つ理由を数学的に説明する際には、その根拠として成り立つ事柄を示して理由を説明する必要がある。その際、説明・証明の根拠として用いる公式やきまりの指導においては、児童生徒がその根拠を理解できるよう、日常の具体的な場面に対応させる、図や式を用いて関係性を理解させるなど、数学的活動を通して身につけさせることが大切である。

⑥ 家庭学習の課題を指導改善、学習改善に生かす

質問番号 小77 中85	家庭学習の取組として、学校では、児童(生徒)が行った家庭学習の課題について、その後の教師の指導改善や児童(生徒)の学習改善に生かしましたか(教科共通)
--------------------	---





小学校、中学校ともに全国を上回っている

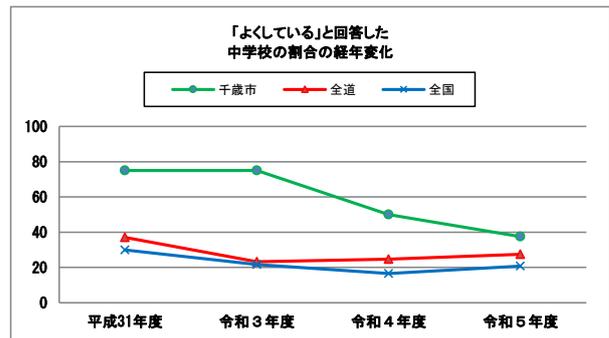
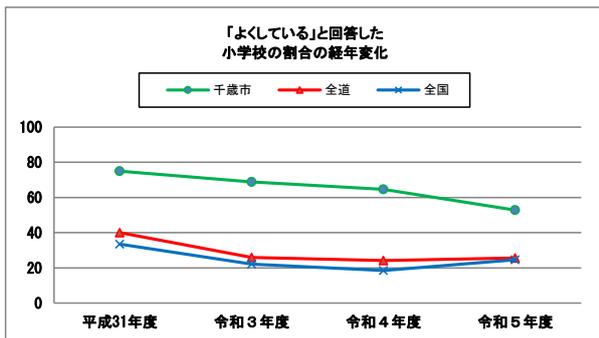
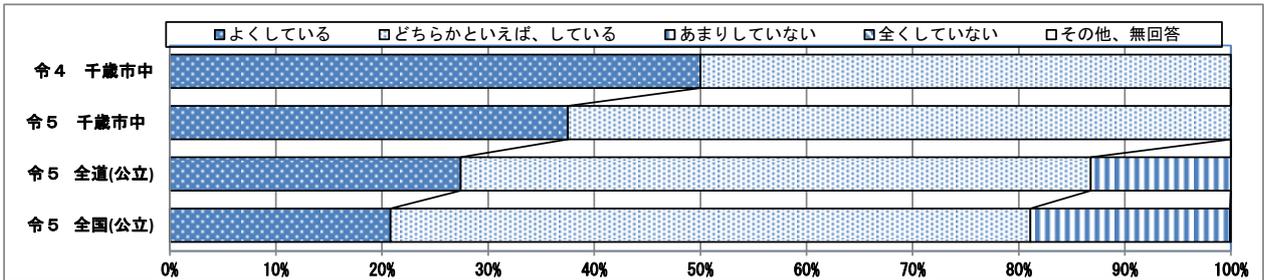
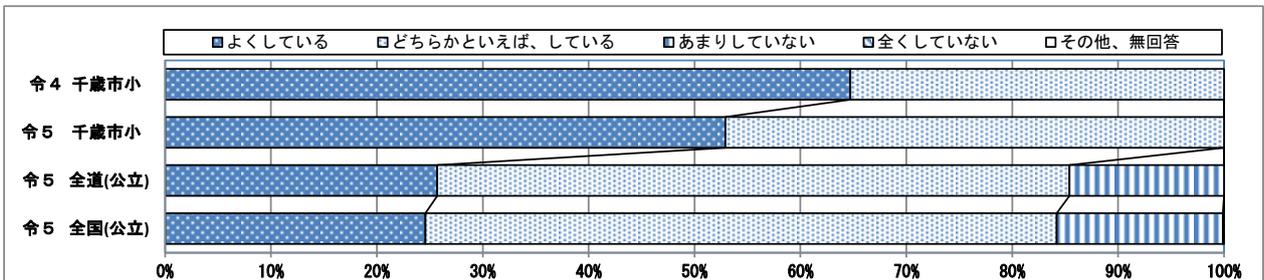
家庭学習の課題を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組を「よく行った」と回答した小学校は70.6%、中学校は37.5%となっており、全国（小30.5%、中21.6%）との比較では、小学校は40.1ポイント、中学校は15.9ポイント上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして課題（宿題）を提供している。これまでも各校においては、家庭学習の習慣づくりや内容の充実のため、「家庭学習の手引き」を作成・配布するとともに、具体例を挙げながら指導したり、学年・学級だよりに家庭学習のヒントを載せたりするなどの工夫・改善を図ってきた。

家庭学習の課題（宿題）を指導改善や児童生徒の学習改善に生かす取組については、これまでも理解が不十分な問題については授業等で確認し、期間をおいて再度与えるなど、与えた課題について確実に身に付けさせる指導について工夫が重ねられてきたが、今後は予習を生かす授業づくりや一人一台端末を活用した家庭学習など、学校の授業と家庭学習をつなぐ仕組みの一層の構築が望まれる。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して

⑦ 教職員研修の充実

質問番号 24	個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加している（オンラインでの参加含む）
------------	---

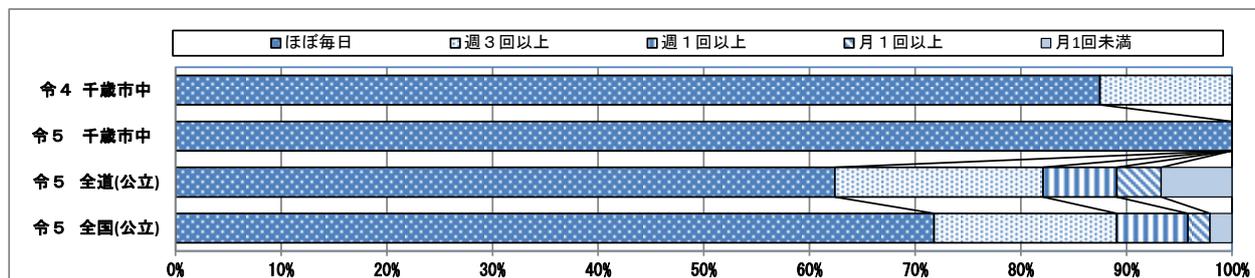
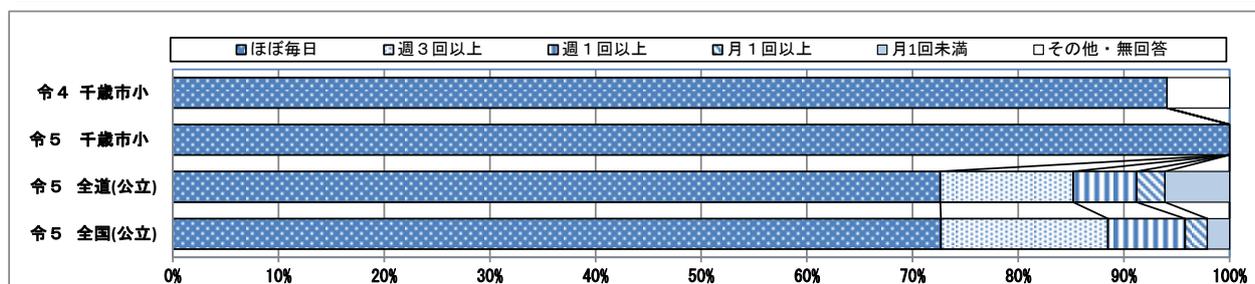


参加の仕方を工夫して研修に臨んでいる

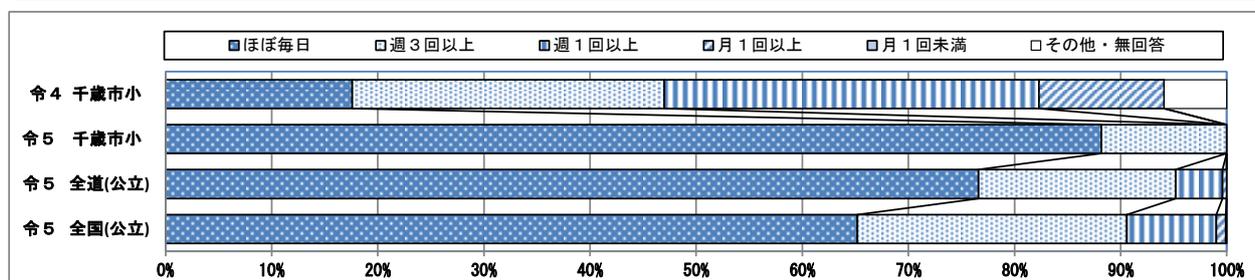
「よくしている」と回答した学校は小学校 52.9%、中学校 37.5%であり、小・中学校ともに全国（小 24.6%、中 20.8%）を上回るが、コロナ禍以降、感染症対策から、研修・研究の機会の減少、参加人数制限によって、小中ともに経年変化では減少している。校外の専門教科等に関する研究会、長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修については、オンライン研修も含め、参加の仕方を工夫することによって、教員が教科の専門性を高めたり、個別の学校では招聘できない著名な講師から直接教示を受けたりする機会が確保されている。学校に求められる今日的な教育課題は増加の一途となっており、受講できる研修機会も限られていることから、今後は、個々の教員が受講した研修内容を校内で還元できる研修体制を構築し、授業改善に結びつく指導方法の交流や指導過程の見直しを行うなど、効果的に資質能力の向上を図る仕組みを整える必要がある。

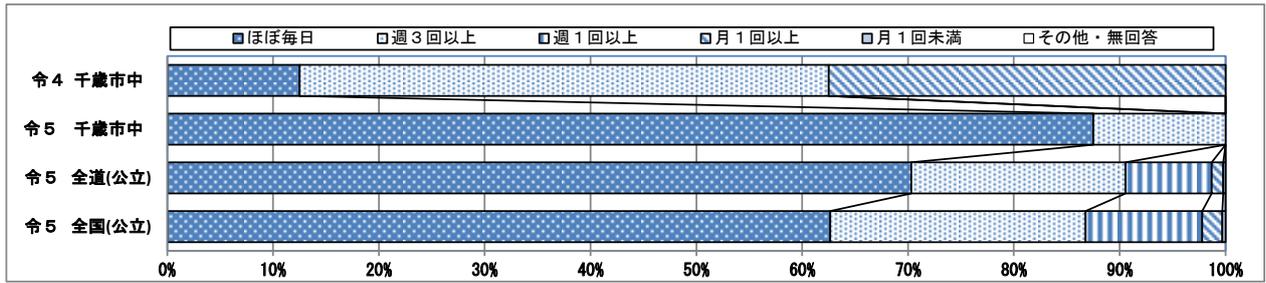
⑧ ICT機器の活用

質問番号 小52 中60	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導において、前年度に教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）等のICTを活用した授業を1クラスあたりどの程度行いましたか。
--------------------	---



質問番号 小55 中63	調査対象学年の児童（生徒）に対し、前年度までに、児童・生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。
--------------------	--





小・中学校とも電子黒板等の活用は日常に、一人一台端末の活用も飛躍的に増加

電子黒板等の大型提示装置使用の授業を「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校で 100%、中学校も 100%であり小・中学校とも全国（小 72.7%、中 71.8%）を大きく上回り、積極的に活用されている。

本市では、全ての普通教室に加え、小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等が配備され、デジタル教科書についても、平成 28 年度までに小・中学校への配備を終えたことから、全国、全道に比べて電子黒板等大型 ICT 機器の活用頻度が高い。

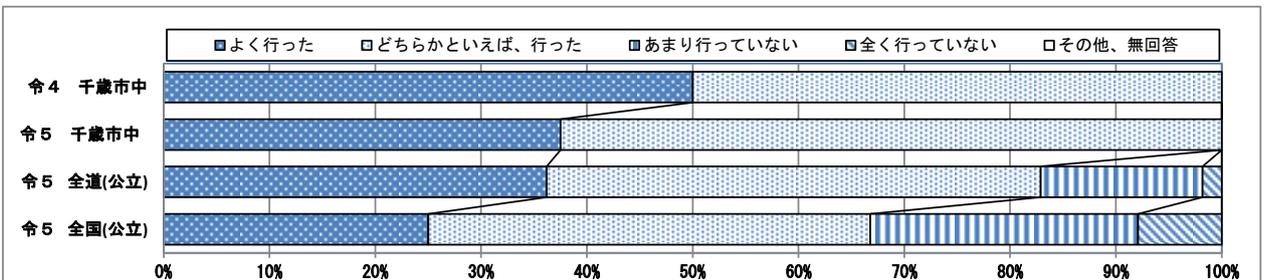
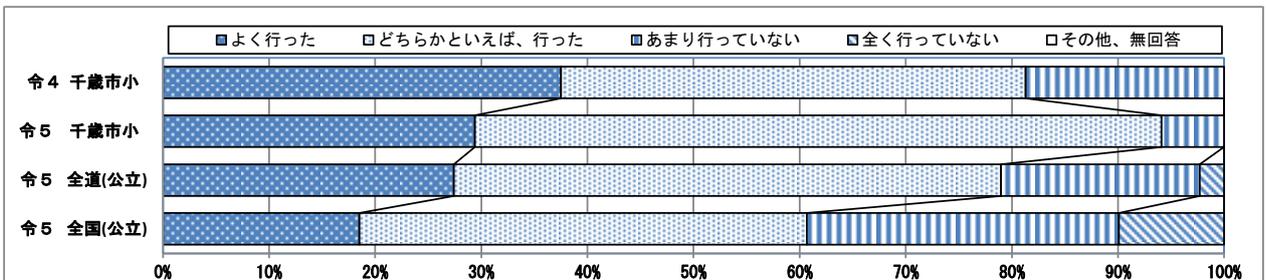
一人一台端末を活用した授業を「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校 88.2%、中学校 87.5%であり、いずれも全国（小 65.2%、中 62.6%）を上回っている。昨年、小学校に一人一台端末が整備され、本市の全児童生徒が活用できる体制となったことから、飛躍的な増加がみられた。

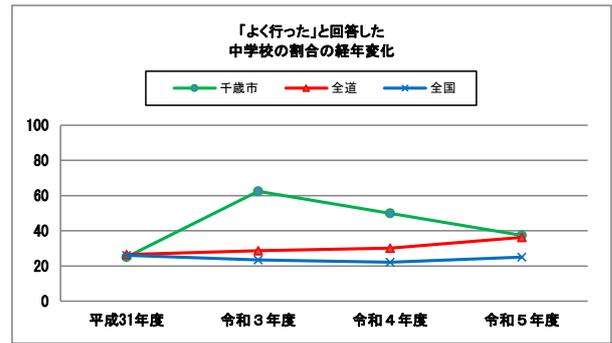
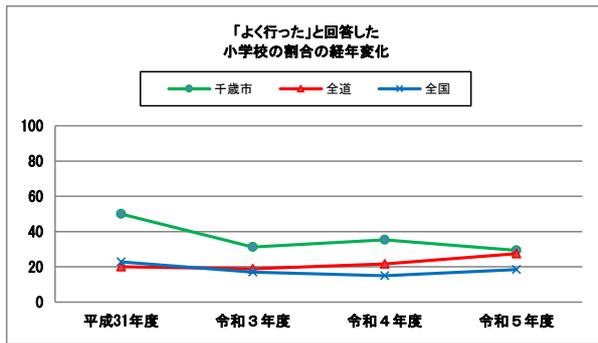
今後は、調べる・まとめる・説明する等の探究的な活動に加えて、感想や意見を伝え合う対話的な学びのツールとして、さらにデジタル AI ドリルによる家庭学習の充実などの効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業改善に生かしていくことが望まれる。

3 小中連携・一貫教育の取組に関して

⑨ 教育課程に関する共通の取組

質問番号 小 6 7 中 7 5	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。
------------------------	--

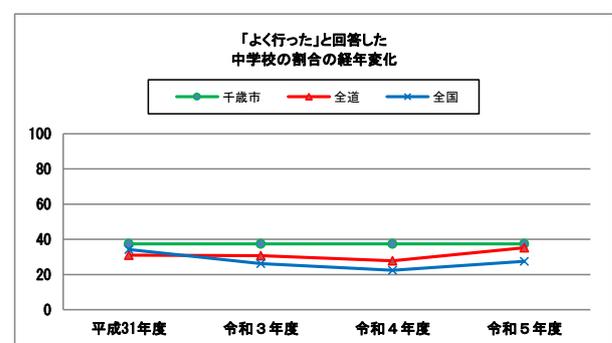
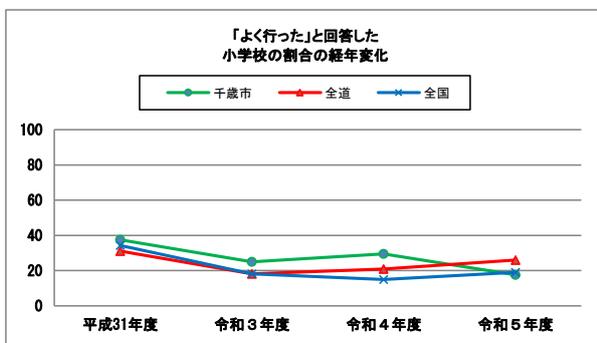
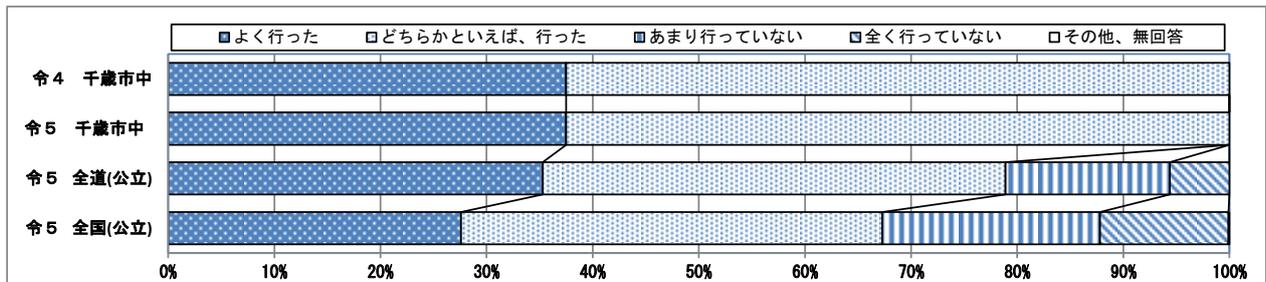
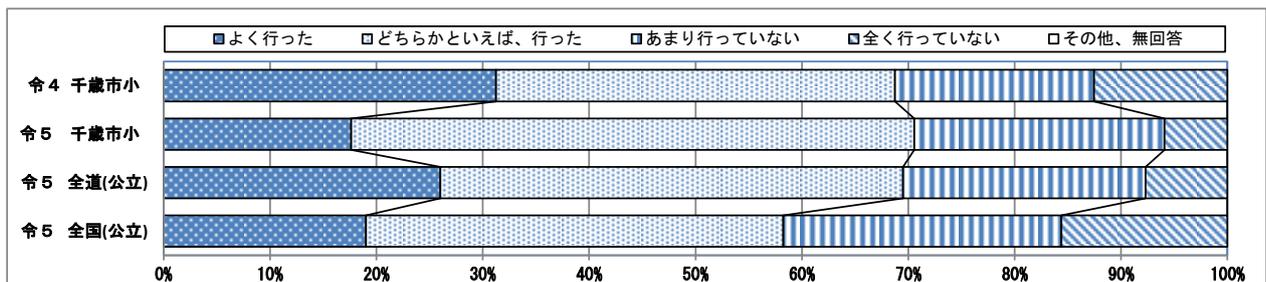




「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」という質問に対して、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より増加して 29.4%、中学校は減少して 37.5%であり、小・中学校ともに全国（小 18.4%、中 25.0%）を上回っている。

⑩ 合同の研修

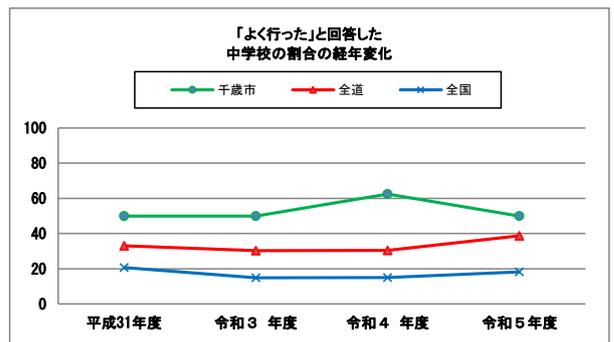
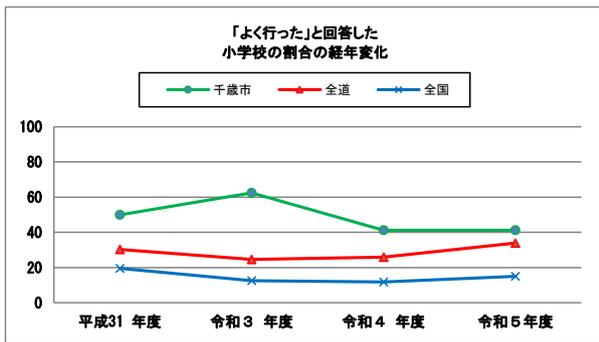
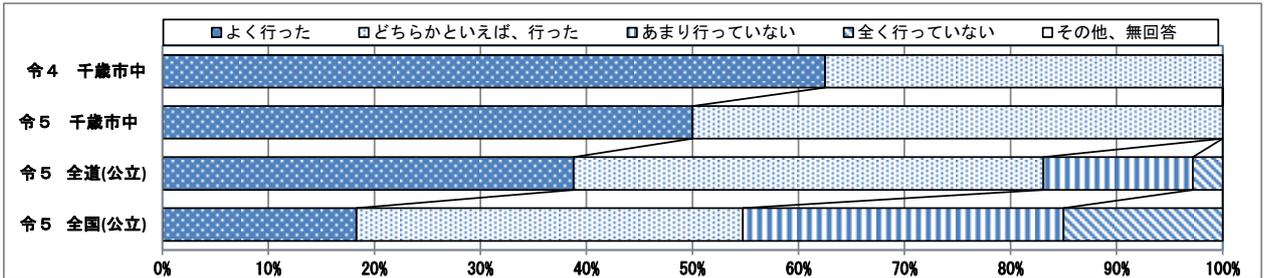
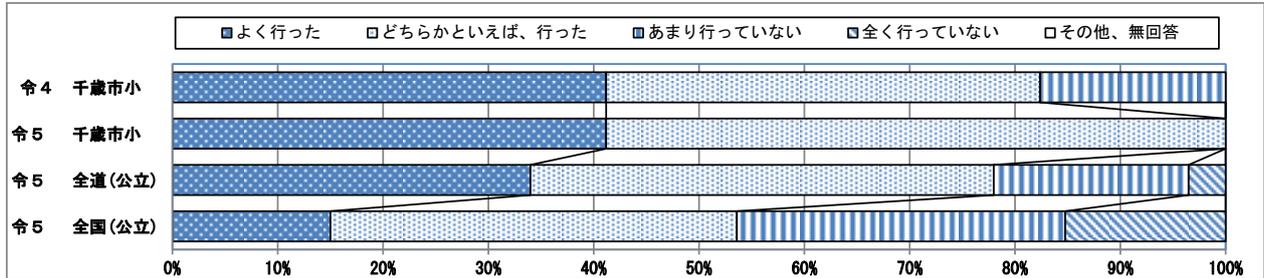
質問番号 小 6 8 中 7 6	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。
------------------------	---



「前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行ったか」という質問に対して「よく行った」と回答したのは、小学校は前回より減少して 17.6%、中学校では前回同様 37.5%であり、小学校は全国（小 19.0%）を下回り、中学校は全国（中 27.6%）を上回っている。

⑪ 全国学力・学習状況調査分析結果

質問番号 小69 中77	令和4年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有しましたか。
--------------------	--



小中連携・一貫の取組は、今後さらなる深化が期待される

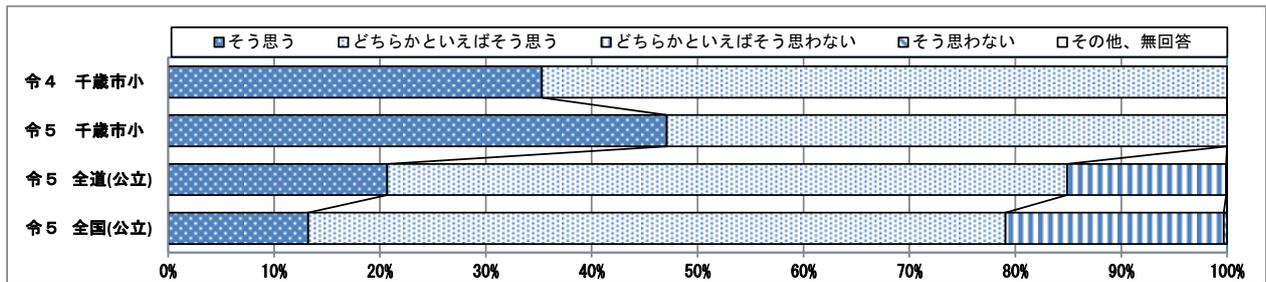
「令和4年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有したか」という質問では、「よく行った」と回答したのは、小学校は前回同様の41.2%、中学校は前回より減少して50.0%であるが、全国（小15.0%、中18.3%）を上回っている。

⑨⑩⑪に見られる小中連携・一貫教育の取組に関しては、本市において令和3年度から「小中連携・一貫教育実施要領」を策定して取り組んできたところである。コロナ禍での学校間の交流制限や複数の中学校への接続など取組の困難さはあるが、全国学力・学習状況調査結果の共有などをきっかけとして、校区の子どもが義務教育9年間で身に付けるべき資質能力を明確にして、教育課程や授業改善の方策の連携した取組が期待される。

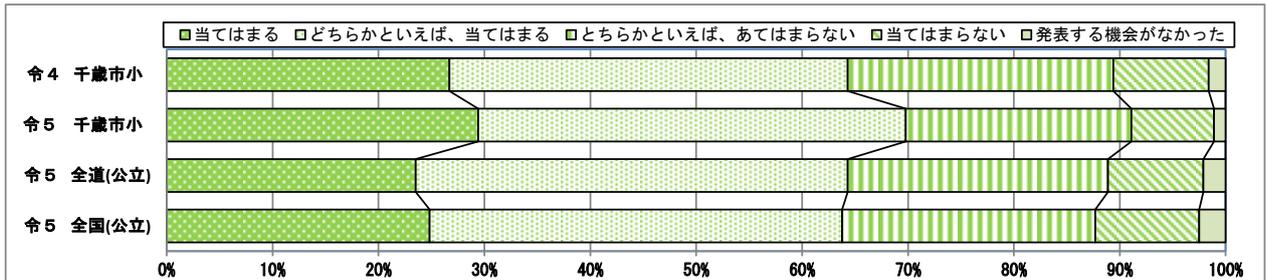
4 授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問紙の回答と比較）

⑫ 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—1

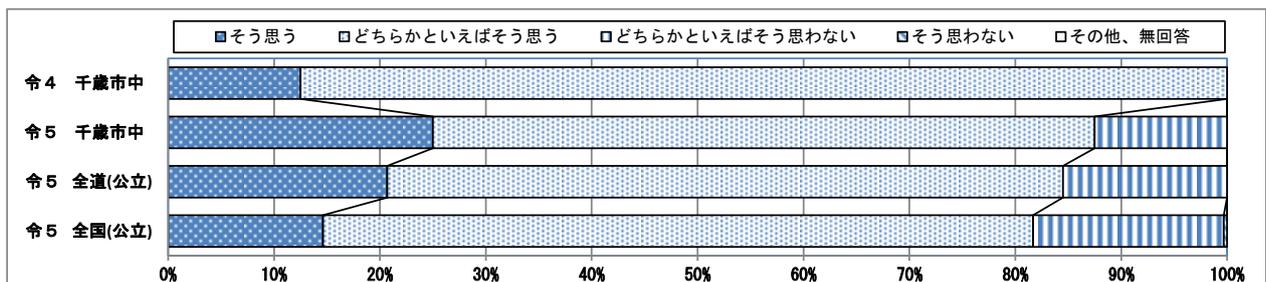
質問番号 27	調査対象の児童は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。
------------	---



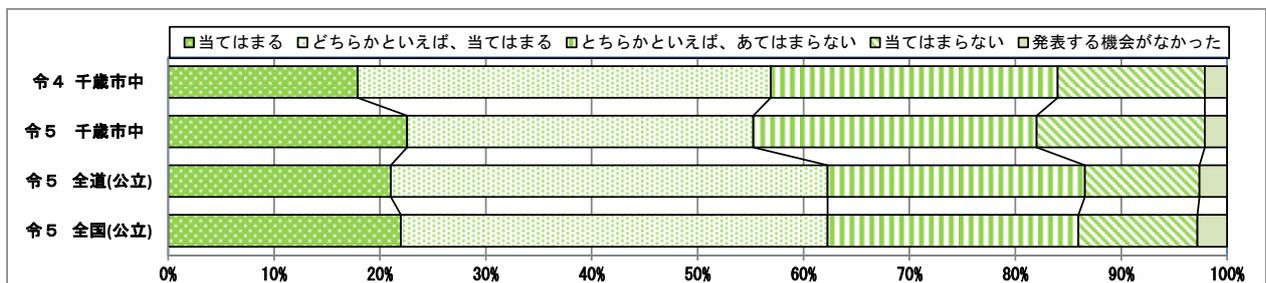
質問番号 32 5年生までに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。 **児童質問紙**



質問番号 24 調査対象の生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。



質問番号 36 1, 2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。 **生徒質問紙**



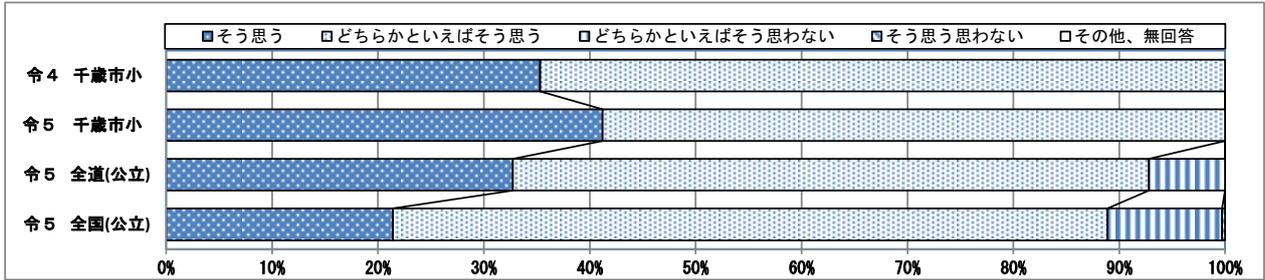
「調査対象の児童生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思うか」という質問に対して「そう思う」と回答した学校は、小学校は47.1%で全国(13.2%)を上回っている。中学校も「そう思う」と回答した学校は25.0%で全国(14.6%)を上回っている。

児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表したか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は29.4%(全国24.8%)、中学生は22.6%(全国21.9%)である。

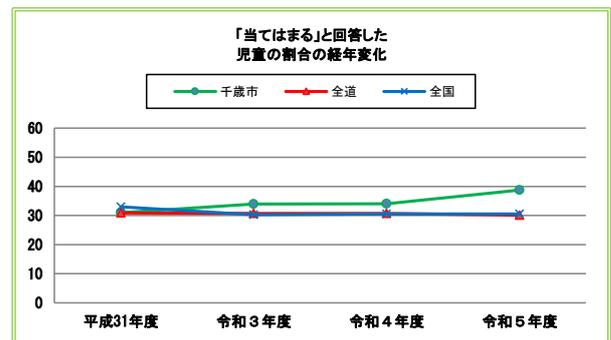
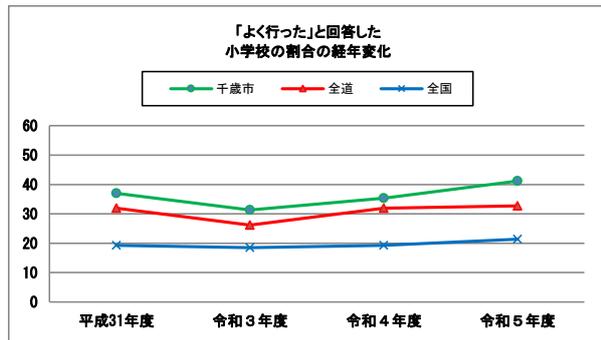
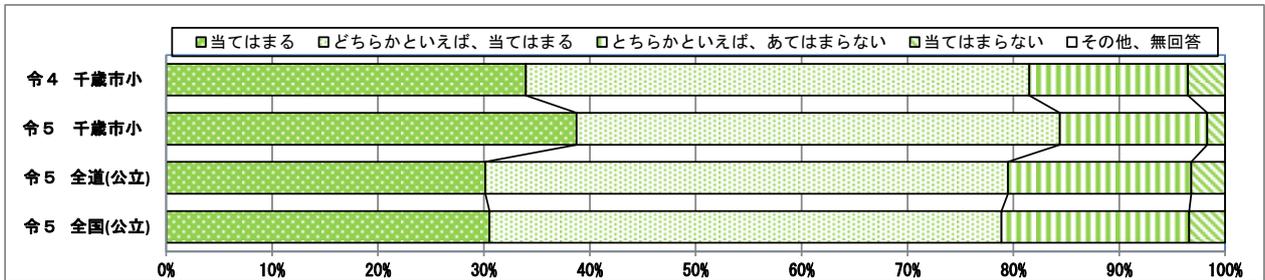
教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は9.1ポイント広がって17.7ポイント、中学校は3ポイント縮まって2.4ポイントである。

⑬ 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—2

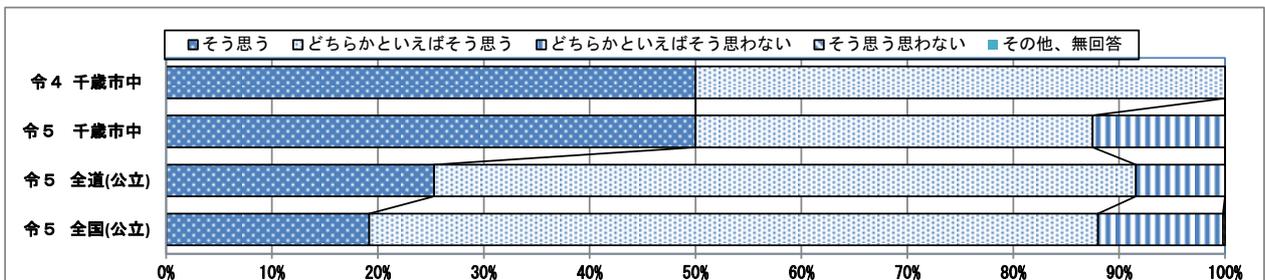
質問番号 26 調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



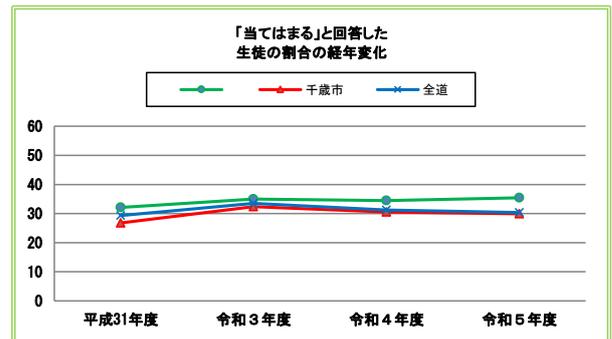
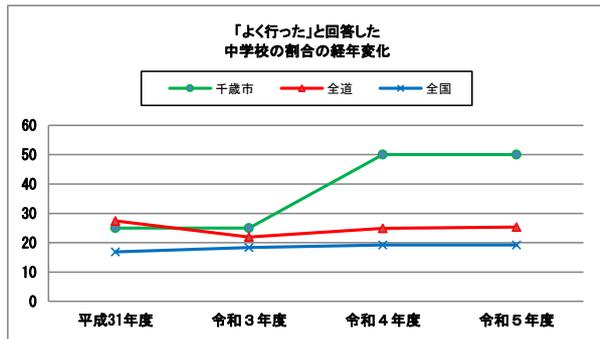
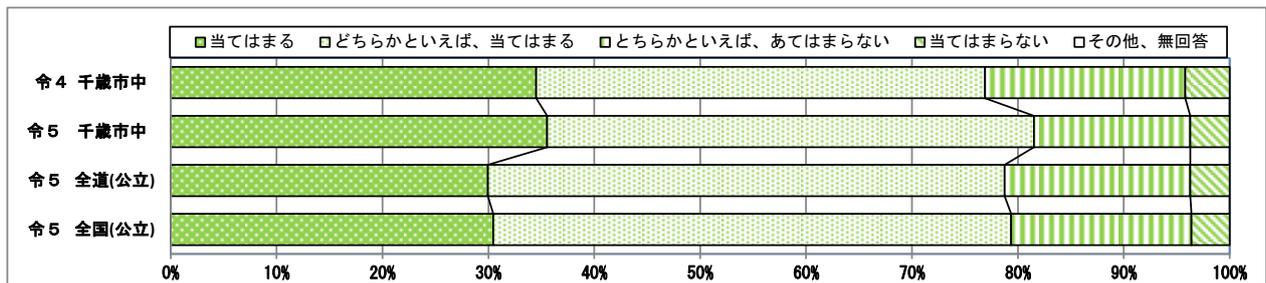
質問番号 33 5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。児童質問紙



質問番号 26 調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



質問番号 37	1, 2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。生徒質問紙
------------	---



授業に対する教師と児童・生徒の意識の差をさらなる授業改善に生かしていくことが望まれる

「調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」という質問に対して小学校は前回より 5.9 ポイント増加して 41.2%、中学校は前回同様の 50.0%であり、いずれも全国（小 21.4%、中 19.2%）を大きく上回る。

児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は前年度より 4.7 ポイント増加して 38.7%、中学生は前回より 0.9 ポイント増加して 35.4%であり、小・中学校ともに全国（小 30.5%、中 30.4%）を上回る。

教師と、指導を受ける児童生徒との意識の差は、小学校は前回より 1.2 ポイント広がって 2.5 ポイント、中学校は 0.9 ポイント縮まって 14.6 ポイントである。

⑫⑬に見られる状況を授業改善に生かすためには、児童生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層子ども視点に立った状況分析を行うと同時に、全ての児童生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、児童生徒自らが学習課題を見出し、活動を選択する機会を設け、興味・関心を生かした自主的、自発的な探究型学習が促されるよう工夫・改善を行っていく必要がある。

また、「書く」「話す」「発表する」などの発信を通して、考えの深化や新たな考えに気づく対話型の授業を構築し、自分の主張が明確に伝わるような話の構成や展開を考える活動、目的に応じて文章と図表とを結び付けて必要な情報を見つけたり、話し合ったりする活動を授業に意図的に組み入れることも大切である。